再臨のキリストによる
第６福音書

テロス第２

—最後の審判—

II

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING No. 6

FINAL JUDGEMENT

SEIDOU 正道

目次

第２部　審判
第６福音書 3
全体の目次 4

第５章　稚拙な経済理念ー　イエスの罪（ １ ）
（ １ ）穢れないために 7
（ ２ ）労働者イエス 10
（ ３ ）現実化した「イエスの理念」 12
（ ４ ）悪魔の思想 17

第６章　報われない努力ー　イエスの罪（ ２ ）
（ １ ）アカ・イエス 23
（ ２ ）誤りを犯せるイエス 27
（ ３ ）努力と報い 30

第７章　共産主義の淵源ー　イエスの罪（ ３ ）
（ １ ）ぶどう園の譬え 35
（ ２ ）怠け者の天国 37
（ ３ ）旧約と新約の経済理念 39

第８章　イエスへの判決
（ １ ）意味なき貧しさ 47
（ ２ ）マルキストへのメッセージ 51
（ ３ ）ハルマゲドンの最終兵器 55
（ ４ ）中道のゆえに右になる 61

第９章　教会の罪
（ １ ）非人間的な人間の捏造 65
（ ２ ）単性論と変わらぬ両性論 70
（ ３ ）イエスの神格化 73

第 10 章　教会への判決
（ １ ）異端の撲滅 79
（ ２ ）判決の言葉 82

第２部　審判

第６福音書

再臨のキリストによる
第六福音書

　テロス第二
　　――最後の審判

　イエスは、一方は金持ちで一方は貧乏という以外、二人の人格についてなんのヒントも与えない。
　かれの教えははっきりしている。貧乏は、それがどうして生じたものであっても、天国への通行手形となる。そして富はそれだけで呪われろ。

　ケン・スミス『誰も教えてくれない聖書の読み方』山形浩生訳より

全体の目次

第１部　再臨

序章　「テロス第１」を振り返る

第１章 人の子の再臨
第２章　メシアの類型
第３章　死者の復活
第４章　芸術と宗教

第２部　審判

第５章　稚拙な経済理念
　　――イエスの罪（ １ ）
第６章　報われない努力
　　――イエスの罪（ ２ ）
第７章　共産主義の淵源
　　――イエスの罪（ ３ ）
第８章　イエスへの判決
第９章　教会の罪
第 10 章　教会への判決

第３部　福音

第 11 章　イエスと悪魔の対話
第 12 章　エヴァンゲリオン（ 福音 ）
第 13 章　終末の徴
第 14 章　再臨の徴

第５章　稚拙な経済理念ー　イエスの罪（１）

（１）穢れないために

経済活動という穢れ

第４章「芸術と宗教」では、私の個性を通して「放浪芸術家的宗教家イエス」の姿を再現してみせた。

これによって「生者イエス」の息吹が、幾分かなりとも、読者のなかで蘇ったのではないかと思う。それこそ、二千年以上の時間を隔てた「死の彼方」から、「死者の復活」として。

では、そうやってイエスに蘇ってもらって、我々が得た知見とは何だっただろう。

結論的に言えば、それは「キリギリスのような芸術家であるイエス」には、まったくもって、資本主義とのシンパシーがなかった、ということである。

もっと平たく言えば、要するに「イエスには、経済のことは分からない」ということである。

経済的問題に対するイエスの反応は、完全に「芸術家の生理」に基づいている。

すなわち「放浪的芸術家の心」は、そんなもの（＝経済）のことを考えたら、とたんに「穢れ」を感じてしまうのだ。

まことにそうなのである。チマチマした金勘定など、彼にとって「穢れ」以外の何物でもない。

それは、せっかく聖霊によって押し広げられた心を、瞬時に卑小化させてしまう「穢れ」以外の何物でもないのだ。

事実、そのように心が穢れてしまうと、芸術家にはてきめんに、インスピレーションが降りてこなくなる。

すると何も書けなくなるし、何も描けなくなる。芸術家にとっては、そうなることが一番こわい。

そのようなことになるぐらいなら、たとえひもじくても、経済的なことなど考えないほうが、まだしもいい。

富裕者への侮蔑

そして、そうやって経済的なことを考えないから、彼は、金の流れについて詳しくなれない。お金というものの肯定面にも、気づくことが出来ない。

彼にあっては、ただひたすら、お金を嫌うばかりである。そして「相手を嫌えば、相手からも嫌われる」というのが普遍的な摂理なので、お金に嫌われた彼は、当然のように貧乏になる。

ところが、放浪的芸術家にあっては、そのような金欠状態に、ある種の「誇り」すら、感じることが出来るのだ。

なぜなら経済について疎いと、そのとき彼は、自分自身に「清貧によって、穢れを持たずに済んだ純真者」を見るような思いがするからである。

やや馬鹿くさく見えるかもしれないが、芸術家当人にとってみれば、これは紛れもなく、真剣な喜びである。それこそ「貧乏くさい喜び」ではあるけれども。

いずれにせよ、こうした感情が、彼の心の中で完結しているのであれば、何ら害は生じない。

しかし、それでは済まされない場合もある。すなわち、この手の芸術家は、往々にして「自分とは反対の立場にある人たち」に対して過度に批判的になるからだ。

そしてもちろん、彼ら「清貧の芸術家」と対極にあるのは、「世慣れた富裕者たち」である。

こうした富裕者たちに対した時、放浪的芸術家の心では、メラメラと侮蔑の炎が燃えさかっていく。

イエスの心にも、あからさまな「金持ちへの侮蔑」がある。嫉妬ではなく、あくまでも侮蔑が。

いや、放浪的芸術家としては、彼は、裕福なパトロンを求めずにはいられないのだ。現実にもイエスには、たしかに富裕な支援者がいたはずである。

であるのに、そんな自分のパトロンに対してすら、イエスの場合、心のどこかに侮蔑の気持ちがくすぶっている。

これは福音書を読めば、すぐに分かることだ。私などは気になって仕方ないのだが、たとえば既出の、

「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがまだ易しい」

というイエスの言葉を、彼のパトロンたちは、一体どのような気持ちで聞いたのだろう。当然おもしろくないに決まってはいるが。

この「針の穴」云々の話は、直接的には、たまたまイエスが出会った、ある金持ちの青年に語られた言葉である。だが、イエスの支援者たちだって、当然これを、伝え聞きぐらいはしていたはずだ。

そうだとすれば、イエス自身も、彼の支援者も、その経済観念の中では、互いに相容れぬ矛盾的感情が渦巻いていたことだろう。

子供じみた経済原理

重ねて言うが、イエスに経済のことは分からない。というより、イエスにとっては、お金のことなどは、普段から「考えの外」に置いておきたい事柄なのである。

そのせいなのだろう。いざ経済的な問題に直面すると、イエスの思考は、ほとんど子供じみた、単純な原理しか導き出せなくなる。

すなわち「お金が必要ならば、持っている人が払えばいい」という。

ここで賢明なる読者諸君なら、すぐに気づくだろう。そこでは「どうしたら、その『持っている金』を産出することが出来るのか」という観点が、完全に欠落しているということに。

ここでは、お金の問題が、見事なまでに「既存」からスタートしている。言い換えれば、お金の「発生」の場面展開が、キレイに白紙化してしまっているのだ。

いや、それも当然の話で、イエスにあっては、そんな事柄などには、まったく興味関心がないのである。

このように言うと、イエスが、いくらか浮薄に見えてしまうかもしれない。しかし私に、イエスを中傷する気持ちなど、あろうはずがない。

それに、少なくとも私には、イエスの経済的無関心を責めることは出来ない。なぜなら、私の心もまた、イエスと全く同様の性質（経済的無関心）を持っているからである。

それに「放浪的芸術家的な気質」という以外にも、このイエスの金銭に対する態度には「そうなっても仕方がない」要因があるのである。次の節では、改めてこのことについて話そう。

（２）労働者イエス

プロレタリアートの限界

イエスの日常生活は、大きなお金のやりとりに、ほとんど縁がなかった。つまり生まれついての生活環境からして、イエスは、経済活動との結びつきが弱いのである。

率直に言って、私たちは「イエスのような環境に置かれたならば、誰だって経済のことに疎くなるに決まっている」と断言できるだろう。

では具体的には、イエスの経済的環境とは、一体どういったものだったろうか。

さしあたって福音書には「イエスは、大工であるヨセフの息子である」と記されている。

すなわち『マタイによる福音書』の一節に、イエスが民衆に「この人は大工の息子ではないか」と指摘されている場面があるのである。

しかし、最近の聖書学者たちは、その「大工」というのが、現代的な「職人としての大工」ではないと推測している。

彼らによれば、現実のヨセフは「土木作業に従事している、日雇い労働者に過ぎなかった」らしい。ただ、その労働の一部が建築に関わっているがゆえに、一応「大工」と呼ばれていただけなのだ。

となれば、少年期のイエスは、そうした「日雇い労働者」である父を手伝って生活していたことになる。

日雇い労働者――つまりプロレタリアート（無産階級）の生活である。しかも彼らは、情報に恵まれない、大昔の、田舎のプロレタリアートである。

したがって、その場暮らし、その日暮らしが、イエスの経済観念の育成フィールドだったことになる。

そうだとすれば、イエス自身は、多額の金銭など、見たことも触れたことも無かったに違いない。むろん、それを取り扱ったこともないはずだ。

端的に言って、そのような人間が、系統だった経済観念など、持てようはずがない。というより彼は、経済知識に関する、著しい無知に晒されずには済まない。

自己犠牲的な経済理念

イエスの場合、その無知なところに、例の「放浪的芸術家としての気質」が追加される。要は、経済活動への無関心である。

よって、この時点でまとめれば、イエスは経済的なことに関して「無知で無関心」ということになる。

これを経済理念の更地とでも言うべきだろうか。更地とは、要するに「手入れされていない空き地」のことだ。

いや、まんざら、そのような更地でもないかもしれない。とりたてて経済に関心がある訳ではないが、イエスは、その空き地に、ある種の「手」を加えているからだ。

それはつまり、空疎な経済理念に、他のことと同様の「自己犠牲的な美への指向」を当てはめている、ということである。

すなわちイエスは「自分を犠牲にしてでも、貧しい人たちに『豊かさ』を与えるべきだ」という、経済的な考えを持っているのである。

そうすると、すでに金銭を持っている人が、その金銭を「持ち続けている」ことは、イエスにとっては「醜いこと」ということになる。

それは愛のない状態、自己犠牲的な美しさがない状態だからである。

それだからイエスは言うのだろう、

「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい（ マタイ ）」

「天の倉に宝を積みたいのなら、今持っている財産を、すべて貧しい人たちに分けてあげなさい（ マタイ ）」と、そのように。

しかし、ならば私は、いま改めてイエスに問いたい。

そのように「貧しい人に財産を与えること」が是認されることは分かった。では、その既に在る財産は、一体どのように作られたものなのだろうか、と。

もう一つ。少しでも財産があれば、貧者に寄付したほうがいい、と言うのならばである。

その言葉に素直に従う人間に「まず初めに、小なりと言えども『ある程度まとまった財産』をつくること」など、そもそも可能だろうか、と。

しかしイエスは、このような質問に対しては、聖書の中に答えを用意してくれていない。

というよりイエスは、それに関して何も知らないし、何かを知ろうという気持ちすら、持ち合わせてはいないのである。

それはもちろん、彼が「プロレタリアート」だからであり、彼が「放浪的芸術家」の気質を持っているからである。

（３）現実化した「イエスの理念」

共産主義という結論

「たとえ自分を犠牲にしてでも、貧しい人たちに『豊かさ』を与えるべきだ」という思想理念。

イエスのこの考えを、実際の経済活動として現したのが、共産主義社会であることは間違いない。

それも当然のことで、豊かさが貧しさのほうへ移動していけば、その経済圏は「豊かさの均等」という、共産主義の理想に近づく。

たとえそれが、実質的には「貧しさの均等」になっていようともである。

そもそも共産主義とは、経済的な平等主義である。だから「より大きな経済活動を行った人が、それに見合った、大きな報酬を与えられればよい」というのでは全くない。

誰かが大きな報酬を与えられたとしたら――それによって大きな財産を築いたとしたら――その時には、かかる財産を万民に分け与えよう、というのが共産主義の論理なのである。

その結果は、もちろん国民全体の経済的平等だ。ただし、それを「徴税と再分配」いう「強制」によって行うところに、共産主義のミソがある。

とはいえこれは、あまり味の良くないミソであり、私など、何やら不穏な影を感じずにはいられない。

たとえばイギリスの首相であったサッチャーは、共産主義的な前政権を振り返って、こう言っている。

「お金持ちを貧乏にしても、貧乏人はお金持ちにならなかったでしょう」

この一言に、共産主義の限界が、そのまま現れていると言ってよいだろう。つまり「豊かさの均等」という共産主義の目標は、結局「貧しさの平等」という結果に行き着いてしまったのである。

原始キリスト教会の共産主義

歴史的な事実として、初期のキリスト教会は、原始的な共産主義の状態にあった。

そこでは信者たちが、各々の財産を持ち寄って集まっていた。そして、その集積された財産を再分配することによって、均等な経済圏を形成していたのである。

このこと自体に、批判の必要はない。

そこが慈善的、宗教的な場であり、ごく小規模な共同体であれば、こういった経済システムであっても問題ない。それは誰にも迷惑をかけないものだからだ。

しかし、この経済圏が、国家規模にまで拡大された時には、私は、これを批判しない訳にはいかなくなる。

なぜなら、そのような「共産主義のシステム」は、自己内部に「深刻な欠陥」を生み出さずにはおかないからだ。

経済における深刻な欠陥――そう、私は先刻から触れている、共産主義の、あの「貧しさ」のことを言っているのである。

奪われる感覚

マルクスから始まる、近代における共産主義。それは強度の累進課税と、その累進課税によって集積された財産の、均等な再分配によって運営されることになる。

累進課税とは、財産を多く持てば持つほど、より高い税率をかけられる、という税制システムのことだ。

ということは、そのシステムの下では、より多く働いて富を築いた人ほど、その富を「奪われる感覚」を味わわねばならなくなる。

身近な例を出そう。正直なところ私は、日本国民としては、平均以下の給金しか貰っていない。

そんな私であっても、毎月の給料明細を見たときには「何でこんなに、税金で差っ引かれなきゃならないんだ？」と思うことがある。

言い換えれば「何でこんなに、税金で奪われなければならないんだ？」と思うことがあるわけだ。

そういった「奪われる感覚」を、共産主義国のブルジョアジーは、それこそ「何倍にも増幅されて」強要されることになるのである。つまり馬鹿げているほど、税金が高いのだ。

事実、累進課税の下では、自己収入の７割以上を、税金で持っていかれることもある。

しかも、それは彼が「頑張って、多くを稼いだがゆえに」なのである。共産主義とは、そうした「富裕者にとり、実に口惜しい経済システム」なのである。

こういったシステム下では、どう考えたって「豊かさ」は生じようがない。豊かになればなるほど「それを多く奪われる悲しみ」を味わう羽目になるのだから当然だろう。

それだったら、と彼は思うに違いない。

それだったら、いっそ豊かになどならないほうがいい。そのほうが傷つかないで済むし、辛い思いもせずに済む。大抵の人なら、そのように思ってしまうに違いない。

一つの答えを出したマルクス

しかし、その「政府による収奪」「累進課税による収奪」は、マルクスによれば、飽くまでも「正当な行為」なのだという。

そのことの妥当性を検証する前に、私には先行して言っておきたいことがある。

実はマルクスは、ここで、イエスが結局投げ出してしまった問題に、一つの答えを与えているのである。

私は本章の第１節において、イエスの経済観念について、次のように語った。

――いざ経済的な問題に直面すると、イエスの思考は、ほとんど子供じみた、単純な原理しか導き出せなくなる。

すなわち「お金が必要ならば、持っている人が払えばいい」という。

そこでは「どうしたら、その『持っている金』を産出することが出来るのか」という観点が、完全に欠落している。お金の問題が、見事なまでに「既存」からスタートしている。

つまり、お金の「発生」の場面が、キレイに消失してしまっているのだ――

他方マルクスは、この「キレイに消失している」問題、イエスが無視した問題に対して、彼なりに確固たる答えを出した。

すなわち「どうやって人は財産を作るのか」という問題に対して、ひとつの明確なビジョンを与えたのである。

「金を持つとは、どういう事か」

「どうしたら、その『持っている金』を産出できるのか」

その答えとは、要するに、

「富める者（ ブルジョアジー ）は、その財産を、労働者（ プロレタリアート ）階級からの『搾取』によって築いた」というものである。

つまり、マルクスにとっての財産とは「労働者から搾り取って産出するもの」なのである。

そして、そうやって産出された財産を保持する者こそ、マルクスが「ブルジョアジー」と呼んでいる階級である。

したがってマルクスは、財産の産出に関して無知なイエスに対し、次のように教えてやることが出来るわけだ。

「労働者から搾り取ると、そこに財産というものが発生するものなのだよ」と。

むろん、それが真実であるかどうかは、全くもって別の話ではあるけれども。

搾取による財産の創出

マルクスの「解答」を、もう少し詳しく見ていくことにしよう。

まず改めて言うが「富める者は、その財産を、労働者階級からの『搾取』によって得

た」というのが、マルクスなりの「富の発生メカニズム」である。

搾取とは、文字どおり「搾り取る」ことだ。よって、そこには当然「相手から無理やり奪う」という、悪しきニュアンスがこもっている。

被害者からすれば、強く搾られてボロボロになった雑巾が「何も、ここまで搾らなくてもいいじゃないか」と訴えるようなイメージになるだろう。

そして、こういうイメージを持つと、「現に富んでいる者」という存在は、どうしても「他人から富を奪った悪い奴」という風にしか、理解することが出来なくなる。

要するに「富める者」は悪役であるということだ。

そうであれば、かかる「富める者」から、累進課税によって財産を奪うこと。その財産を、貧しい労働者階級に還元することは、マルクス的に言えば、立派な「正義」ということになる。

ごく一般的に考えてみても、不当に奪われたものを取り戻すことは、明白なる正義だからである。

とはいえ、これが本当に、現実の世界を映し出した理論だろうか。私たちは、マルクスの言うことを、素直に信じてよいのだろうか。

とてもではないが、私には、そうは思えないのである。

これは率直に言って、貧しいものたち（ プロレタリアート ）による、一方的な「富者への嫉妬と憎悪」ではないだろうか。

つまりプロレタリアートの正義とは、自分たちの嫉妬と憎悪を偽装的に「正義」と呼んだもの。あるいは嫉妬と憎悪を、無理やりに正当理論化したものではないだろうか。

であれば「累進課税によって、ブルジョアジー（ 富者 ）たちから、高額の税金を取り立てる行為」は、プロレタリアートたちの「シャーデンフロイデ」だったということになる。

かかるシャーデンフロイデとは、嫉妬の対象の不幸を見たときに、心に湧き上がる、「ざまあみろ」的な歓喜のことである。

愛なき世界の正義

本物の正義を支えるのは愛である。愛を貫くための言行が正義である。

しかし、マルクスの正義が、単なるシャーデンフロイデであるならば、彼の正義のうちには、どう見ても愛は存在していない。

そもそも愛は、人の心のなかに宿るものである。そして心は物ではない。

そうであるのにも関わらず、マルクスは唯物論を説いている。すなわち彼は「世界には物質しかない」と説いているのである。

よって、そこに愛の居場所がないのは、むしろ当然の道理である。真実の愛は、心と一緒に、マルクスの世界観から追い出されてしまった。

そして、愛が失われた穴は、支配欲が埋めるという。

この言葉を、ユングの著作のどこかで見つけた時には、胸にずっしりと、その真実味

が迫ってきたものだった。

なお、愛とは「人の幸せを実現するためになら、自分を犠牲にしても構わない」という考え。支配欲とは「自分の欲求を叶えるためなら、人を犠牲にしても構わない」という考えである。

事実、愛を忘れた人は、いつも「他人が、自分の思いどおりに動くこと」ばかりを望むようになる。そして、それが「支配」というものなのである。

まさしく、愛が失われた穴は、支配欲が埋めるのだ。

だが、貧者が富者を支配するのは難しいことだ。そこでロシアでは、まず数にまかせた暴力（ 革命 ）によって、多数派であるプロレタリアートたちが、ブルジョアジーたちの上に立った。

そうして、その革命政府から、共産主義国家がつくり出されることになる。

その共産主義国家で、プロレタリアートたちは、ついに「自分たちの国における金の流れ」を、法律として整備させたのである。

つまり彼らは「強度の累進課税による徴税、その税金の再分配」という法律を作ったのだ。

これがマルクスが始祖となった共産主義国家、換言すれば「搾取された富の奪還」を国是とする、経済圏の全体像である。

そこでは貧者たちの「富者への嫉妬」が、ブルジョアたちを「搾取者」と見立てさせる。

そうして、その搾取者という標的が、いきおいプロレタリアートの中に、正義の経済学を作らせたわけだ。

「奴ら富者たちの財産は、我々が奪還してもよいのだ」という「正義」の経済学を。

（４）悪魔の思想

欺瞞的な「正義の理論」

ところで、愛と同様、憎悪や嫉妬もまた「心」に属するものである。

だから、唯物論（心などない）が教義の世界では、「そんなものはない」と錯覚することが出来る。つまり、憎悪と嫉妬がステルス（隠密）の状態になる。

よって、そのような醜い心（＝憎悪、嫉妬）は舞台裏に隠され、表舞台では――それが欺瞞的であることも忘れられて――「正義の理論」だけが、声高に叫ばれることになる。

「搾取者から、われわれ貧者が、累進課税によって財産を取り戻すことは当然である」

「憎悪から言っているのではない。嫉妬から言っているのではない。我々は、ただ正義の理論を語っているのである」

「ならば、たとえ暴力によってでも、世界中で共産主義革命を起こそうではないか。それは紛れもない、正義の拡大なのだから」

こうした偽善の言葉の裏にこそ、私には、マルクス主義の「隠蔽された本質」があるように思われる。そこには、憎悪と嫉妬にまみれた「この世の地獄」がある。

したがって霊的な目で見れば、実際そこに、地獄に巣くう悪魔たちの姿が見えてくることだろう。

『宣言』読書時の霊体験

事実上、霊的に見れば、マルクス主義とは「悪魔たちが作った、地獄的な経済学」である。

さらに言えば、経済学であることに留まらず、それは本質上「悪魔の宗教」「地獄的な宗教」でさえある。私の霊的感受性もまた「それが真実である」と裏書きしている。

というのは、私はこれに関して、ある特徴的な霊体験を、実際に味わっているからである。

それは、マルクスとエンゲルスの共著である『共産党宣言』を読んだときのことだ。今から二十数年も前のことである。

私は日常的な読書の一環として、あの薄い本のページをめくった。すると本当に「一ページめくるごとに！」埃臭い煙を吸い込むような感じがしたのである。

このときの苦しい感覚は、今なお鮮明に覚えている。喉の奥が、小さな虫の大群に浸食されていくような不快感。あの時ばかりは、大好きな読書も「持続する苦しみ」でしかなかった。

そして本を読み切った時には、暗い霊的な塊が、胸のあたりに留まっている感じがした。まことに息苦しかった。まるで、有害物質を吸い込んで、中毒状態になったようだった。

それ以来ずっと、私は、マルクスやエンゲルスの著作は読んでいない。長大な『資本論』など、とても手に取ることが出来ない。

それは、たとえ不勉強とそしられても、あの「苦しい読書」を、長期にわたって、味わう気にはなれないからである。

そして、そんな悪魔の経済学、悪魔の宗教である共産主義が「人類の豊かさにつながる、生産的な経済システム」となる展望はほとんどない。

その本性上、悪魔たちは、人類の未来を奪うことばかりを企んでいるからだ。

効能は、経済を疲弊させること

もっとも、短期的、一時的にならば、共産主義が、大きな経済的成果を生むこともあるだろう。

というのは、統制型の経済が、それまでの無駄なプロセスを「ごり押しに」省いて、急速な効率化を図るからである。

それだから、共産主義国であるソ連も、その初期だけを見れば、たしかに経済的に発展した時期があった。

しかし、長期的、持続的に眺めれば、疑いようもなく、共産主義の経済は無能である。

なにしろ、もし誰かが働いて豊かになれば、そのとき彼は、国家における「悪役」に仕立て上げられてしまうのだからである。しかも、その努力して築き上げた財産のゆえにこそ。

そのとき人々は彼に言う。

「ブルジョアジーめ、お前は搾取者だ」

「ブルジョアジーめ、お前は、私たちの富を収奪したのだ」

そうしてお次は、せっかく作り上げた彼の財産が、実際に、国家に奪われる段となる。あの不合理で無慈悲な、累進課税によってである。

これでは誰だって、進んで働かなくなるだろう。一定以上の財産を作れば、それを奪われるしかないのだから。

だから皆、本音のところでは「そのように奪われるしかない財産なら、はじめから作らないほうがマシだ」と思うようになる。人間心理からすれば、それはまさに「当然の帰結」である。

となれば、共産主義国家にあっては、誰も彼も、精を出して働かなくなる。なにしろ働くだけ損なのだから。

もちろん、そのように「ロクに働きもしない者」ばかりで構成されれば、その経済圏

は、どこまでも衰退するしかなくなるだろう。

よって共産主義というものは、結局のところ「長期的には、経済を疲弊させる効能しか持っていない」と断定することが出来る理念なのである。

共産主義国家の現実

そのせいだろう。共産主義圏である、ヨーロッパの東側陣営や、ソビエト連邦は、その国家経営が見事に破綻してしまった。

それと比べると、中国共産党は、資本主義的な経済特区を設けることで、かろうじて共産主義国家を「矛盾的に」支え続けている。

そうした経済的矛盾を受け入れることなく、それでもなお生き延びている、北朝鮮のような国もある。けれどもそこは、もはや見るのも無残なほどの、極貧地獄と化している。

いや、北朝鮮に限らない。現実の共産主義国家には、どうしても最終的に「貧しさ」という地獄がつきまとう。それが実情と言わざるを得ない。

その貧しさという地獄のなかで、盗みは流行り、人々は大いに飢える。そうして、自分が何かを得るためには、人を騙すことも厭わなくなる。

貧しさというものは自然と――一般的には――人間を、そうしたさもしい、浅ましいものにしてしまう。ゆえにそこは、まさに人間の「一番醜いところ」が横行する世界となる。

そこにあっては、強盗や殺人さえ、珍しくなくなってしまうのだ。

これは本当に、現実世界のなかに出現した、地獄界そのものと言っていいだろう。

だから私は、現実世界に地獄を呼び込む共産主義を、それ自体としても「地獄的なもの」と断定せざるを得ないのである。

そしてその上で――私は共産主義の核心に、かのイエス・キリストの経済観念が隠されていることを指摘せざるを得ない。

第６章　報われない努力ー　イエスの罪（２）

（１）アカ・イエス

イエスの影響下にあるマルクス

イエスがいて、その影響下にマルクスがいる。その逆はあり得ない。西洋に生まれたという時点で、人はすべて宿命的に、イエスの観念に影響を受けることになる。

たとえ彼が無神論や唯物論を唱えたとしても、それでもなお、この事情に変わりはない。イエスの影響（呪縛）から、完全に逃れられる西洋人はいない。

あるいは「すべての西洋人は、無意識のうちに、イエスの観念を、物質世界にリアライズしている」と言ってもいい。

だから、ある意味では「マルクスを通じて、イエスが地獄を作った」と言ってもいい訳だ。前章で見たような、共産主義による貧困地獄をである。

ただし、これに関して、イエスだけにその責任を押し付けることは妥当ではない。

たしかにイエスの経済観念は稚拙であり、正誤の基準で言えば「誤り」である。

したがって、それを率直に「間違いである」「無知の賜物である」と指摘する必要性が、古来からあったのだ。

そして、もし実際にそれをしていたならば、ここまで問題がこじれることは無かったに違いない。早期に誤りを認めていれば、早期に軌道修正も出来たはずだからである。

しかし、誰もそれをしなかった。というより、誰もそれが出来なかった。

なぜならキリスト教会の教義上、イエスは「無原罪の存在」だからである。つまりイエスは罪を生みだす可能性を持たないため、罪をつくり出す「過ち」や「誤り」とも無縁なのである。

そうであれば、イエスの経済観念（＝共産主義に至る傾向）もまた、過誤であるはずがない。

いや、過誤であってはならない。つまりそれは、教義上「何が何でも正しいこと」なのだ。マルクスは単に、その正しいことを「現実の経済学」として焼き直しただけなのだ。

アカであるイエス

ケン・スミスというアメリカ人は、その著書『誰も教えてくれない聖書の読み方』の中で、何のオブラートのかぶせず、ただただ率直に、イエスのことを「アカ」と呼んでいる。

アカとは、ソ連や中共の国旗（赤旗）の色に由来する共産主義者の隠語だ。つまりケン・スミスは、イエスをして「彼は共産主義者である」と断定しているわけだ。

ところが、キリスト教は、当たり前のように「反共」の立場をとっている。すなわち、共産主義に反対する立場を取っている。それは、マルクスの唯物論が、同時に無神論でもあるからだ。

唯物とはつまり、世界には、ただ物（物質、物体）しかない、ということである。

そうであれば、霊である神もまた無い。イエスは『ヨハネによによる福音書』で「神は霊であると」、直截的に言っている。よって唯物論は、イコール無神論である。

まともな宗教が、そんな無神論を受け付けないのは当然である。

もちろん「人の子となった神」を崇めるクリスチャンにとっても、無神論は、許容できる話では全くない。神がないなら、イエスという存在の意義もまた、一瞬にして霧散してしまうだろう。

教会にとっては、神とキリストと霊（聖霊）こそが、第一義のものである。唯物論や無神論など、お話にもならない。これは当たり前のことである。

それだというのに――「キリスト教の教祖であるイエス」が共産主義者であるとは何なのか！

なんたる矛盾、なんたる不合理。この不合理が現実のものであるならば、クリスチャンたちは、その拠って立つべき根幹が揺らいでしまうだろう。

だから、ケン・スミスによる「イエスはアカ」という指摘に対し、クリスチャンなら、それを「世迷い事」「下賤な冒涜」とでも言って、言い返しておきたいところだろう。

けれどもそれは、ここ「第六福音書」の中では、まったく効を奏しない。何の甲斐もない。

これまで語ってきたことから分かるように、ケン・スミスが言っていることは、紛れもない事実だからだ。

イエスは確かにアカであり、彼は色濃く共産主義へのシンパシー（共感）を持っているのである。

貧乏は絶対的正義なのか

私は、自分が小学生だった頃のことを思い出す。

下校時刻、校門を出ると、そこでよく、キリスト教系の新興宗教団体が、小冊子を配っていた。それは聖書を下敷きにした内容のものである。

そして、その小冊子には「金持ちは天国に入れない」と書いてあった。

これはもちろん「金持ちが天国に入るよりは、ラクダが針の穴を通るほうがまだ易しい」という、『マタイによる福音書』の一節が典拠となっている言葉だ。

私は子供心に、この文章に対して、大きな反発を覚えた。「いくらなんでも、こんなのはウソだ」と思った。

だって、彼らの言うことが本当なら、である。もしも性格が悪い貧乏人と、善良な金

持ちが並んだなら、その死後に地獄に落とされるのは、善良な金持ちのほうになってしまうではないか。
「何なんだ、それは！　貧乏なら何でもいいと言うのか！」
　そもそも、貧乏人と金持ちでは、どちらが、より大きく、社会に貢献することが出来るだろう。
　それは、もし彼が善良であるならば、圧倒的に金持ちの方なのではないか。
　富裕な彼は、その経済的な影響力によって、貧乏人では到底不可能な、それはそれは大きな、社会貢献が出来るのではないか。私には、そのように思えたのである。
　もちろん、小学生のボキャブラリーで、このような意見表明は出来っこない。しかし要旨としては、まさしく私は、上述のようなことを思ったのである。その点に関しては間違いがない。

裸の王様にされたイエス

　それは、子供の真っすぐな感受性が、裸の王様の姿を、ただただ率直に見た、ということだと思う。
　いや、子供ばかりではない。たいていの大人だって、上のような矛盾ぐらいは、簡単に見抜けるはずなのである。
　しかし、クリスチャンばかりは、みな歪んだ眼鏡をかけられてしまうのだ。「あのイエスが、間違ったことを言うわけがない」という色眼鏡を。
　すなわち彼らは、骨の髄まで「無原罪の教祖イエス」を叩き込まれているのだ。
　いや、叩き込まれているというよりは「刷り込まれている」と言ったほうが正確だろう。
　それはクリスチャンにとっては、生まれてすぐから、インプリンティング（刷り込み）される「常識」だからである。
　しかも、常識というものほど頑固な固定観念はない。
　そのため、問題自体はごく単純であっても、どうしても彼らは、その単純な問題の解答を、見い出せなくなってしまった。
　すなわち、ちょっと考えれば明白なことなのに、それでもクリスチャンたちは「イエスも間違うことがある」「イエスは間違っている」とは、決して言えなくなってしまったのである。
　それが彼らにとっての「常識はずれの言説」だからであろう。
　それは、本当にあの童話どおりのシチュエーションと言える。
　王様の絶対権力の下にあるため、明らかに裸体であっても「王様は裸だ」と言えなくなってしまった大人たち。
　キリスト教の常識に縛られたクリスチャンたちは、まさしく、そうした大人たちと、同様の立場にあると言えるのである。
　つまり彼らは、それがどんなに奇妙な言説であっても、決して「イエスは間違ってい

る」とは言えなくなってしまったのだ。

（２）誤りを犯せるイエス

無原罪という宗教的欺瞞

改めて説明しよう。キリスト教の教義にあって、イエスは「無原罪の存在」である。現にパウロも、その手紙（コリント二）のなかで、イエスを「罪と何のかかわりもない方」と言っている。

とすればイエスは、罪を持つ可能性を持たないがゆえに、その罪を作り出す「過ち」や「誤り」とも無縁ということになる。

だからこそイエスの「共産主義への指向」もまた、いかなる意味においても「過誤」として扱われなかった。率直に歴史を眺めれば、それは明らかなる過誤であったのに、である。

だが、根本的なところでおかしいのは「イエスに過誤があること」ではない。人間ならば誰だって、過ちや誤りを犯す。それは、どうあがいたって「人間としては」仕方がないことだ。

であれば、本当におかしいのは、教会がつくった教義の方なのである。

本来は人間であるはずのイエスを、もはや人間とも呼べない「無原罪の存在」に奉ってしまった教義。これはハッキリ言って、深刻重大な宗教的犯罪である。

もちろん、この「無原罪の人間」という不世出の存在は、第二のキリストの出現を、有効にブロックしたことだろう。

キリストであることの資格が「無原罪」であるならば、そんな有資格者は、絶対に現れないからだ。

そうであれば、この教義が「初臨のキリストの代理人」たる教会にとって、莫大な利益をもたらしたことも理解できる。

しかし、この宗教的犯罪の代償は、共産主義国の出現という、あまりにも大きな悲劇として、結実してしまったのではないだろうか。

人間としてのイエスを取り戻す

そこで私は「無原罪のイエス」という欺瞞を糺すところから、ことを始めた。すなわち、まず「第五福音書」において、イエスに影（ディオニュソス）を、取り戻してもらったのである。

その書の中でイエスは、影のない清澄なだけの存在から、陰影をもった「人間としてのイエス」へと方向転換をした。そのような存在へと形態が更新された。

実際、第五福音書における「影との合一」は、イエスを著しく人間らしくさせたと思う。そしてそれにより、彼が罪を犯すことを「ごく自然なこと」と思えるような視点が現出したと思う。

その上で私は、人間イエスの過誤を指摘し、これを矯正することを目指す。これが本書「第六福音書」執筆の主旨である。

しかも、それを他人事ではなく、自分自身の問題として行おうと考えている。

つまり私は、第二のキリストとして、イエスと「罪」を共有せんとしているのである。

第２章の「死者の復活」で話した「私の個性を通して、イエスを再生させる」とは、まさしくそういう意味である。

そして、そのようにして罪を共有してから、私は、自分自身の反省によって、イエスの過誤を清算したいと思っている。それが私の義務だと思っている。

イエスと自分を重ねて

私には、それを実現するための資質があると思う。

私もまた、イエスと同様に、芸術家としての気質を色濃く持っている。私は詩を謳い、物語を編み、絵を描き、音楽を聴くことを、無上の悦びとしている。

その反面において、お金の話をするのが億劫なのも、イエスとそっくりだ。経済的知識に関しては、私は本当に、貧しいものしか持っていない。

そんなものに関心を寄せるぐらいなら、絵の一枚か、詩の一行でも書いていたいからだ。まさに私は、典型的なキリギリス型の芸術家なのである。

とはいえ、そんな自分を、そのまま肯定する訳にはいかない。それでは再び、自動的に「イエスの過ちを繰り返す」ことになるからだ。

そうなれば、初臨のときから、そうとうな時間と反省をへて現れたはずの「再臨のキリスト」の存在意義も薄れてしまうだろう。

だから私は、自分には適性がないことを承知のうえで、嫌々ながら経済の勉強をした。とくにマックス・ウェーバーなどは、よく読んだほうだと思う。

けれども、最終的には、難しいことは何も分からなかった。

なにしろ私は「介護職員」という、現代のプロレタリアートなのである。となれば当然、大きな金銭の流れには、縁遠い存在と言わざるをえない。

それに加えて私は、もともと頭がいい方ではない。私が新約聖書の解説で、

――イエスは知識人ではない。イエスの教養の水準は「中の上」くらいだ。本職は大工だ。

佐藤優解説による『新約聖書』より

という言葉を見つけたとき、どんなにか救われた気持ちになったか、読者には分かるまい。

しかし幸いなことには、そんな私にもハッキリと理解できる、経済についての中核的道理が見つかった。しかもそれは、実に単純明解な内容である。

にも関わらず、それは同時に、イエスやマルキストには、どうしても理解が及ばなかった考えでもあるのだ。

そういう訳なので、次の節で、私がどのような「経済的な道理」に巡り合ったのかを、具体的に見ていくことにしよう。

（３）努力と報い

無気力の理由

心理学者は無気力になる理由を、一つは努力しても報われないとき無気力になる。もう一つは何もしなくても報われるとやはり無気力になる。この二つが無気力の根拠だと心理学的に説明します。

これは、加藤寛氏、渡部昇一氏の共著（対話篇）である『所得税一律革命』という本の一節である。この文章そのものは、加藤氏の口述部分にあたる。

加藤氏と渡部氏は、それまでの対話で、ずっと次の二つの立場を対比していた。

「累進課税によって、高額の税金を支払っている富裕層」

「生活保護の立場から、最低税率しか課せられない低所得層」

かたや金持ち、かたや貧乏人。この二つの層には、見た目では、当然かなりの相違性がある。

ところが不思議なことに、このどちらの層も、結果的には同じように「経済的な無気力」に陥るのである。つまり、どちらの層も、いつの間にか、自身の勤労意欲を見失ってしまうのだ。

それはなぜなのか。どうして、富裕層も低所得層も、同様に無気力に陥ってしまうのか。

経済学的に考えると、それは、答えを出すのが大変難しい問題となるだろう。

しかし、これを心理学的に考えると、存外なほど簡単に答えを出すことができる。そして、その答えこそが、冒頭に掲げた文章ということになるのだ。

「心理学者は無気力になる理由を、一つは努力しても報われないとき無気力になる。もう一つは何もしなくても報われるとやはり無気力になる。この二つが無気力の根拠だと心理学的に説明します」

富裕層と低所得層の共通点

加藤氏が紹介した「心理学者の言葉」を、分かりやすく噛み砕いてみよう。

まず富裕層のほうだが、彼らのように金持ちになると、累進課税によって「獲得した利益を打ち消すほどの」高額の税金を払うことになる。

つまり、稼いだ金の大部分は、政府によって、持ち去られてしまう訳である。

そのように「努力をしても報われない状態」になるから、富裕層は、やる気がなくなってしまう。こうして彼らは無気力となる。

これに対して、低所得層には、富裕層と正反対の「理不尽な厚遇」が与えられることになる。

彼らは富を生まないが、経済的保護の観点から、課税率を最低限レベルに抑えてもらえる。

さらには、弱者救済の名目によって、手厚い社会保障までが与えられる。いわゆる「生活保護」が受けられるのである。

そのため彼らの資産は、かなり低レベルではあっても、つねにその手元に残存することになる。

つまり、わざわざあくせく働かなくとも、つねに彼らには、一応の「経済的な安定」が供給してもらえるのである。

それは当然、低所得層にとっての「努力しなくても報われる状態」と言い得よう。心理学的に見れば、そのようなことになる訳である。

無気力な人々で構成される社会

右の考察はまさに「共産主義が、なぜ経済的発展を生みだせないか」という問いの、最も的確な解答になってる。つまり、今や次のようなことが言えるわけだ。

第一に、共産主義とは、富裕層にとり「努力しても報われない」経済制度である。

彼らの努力は、強度の累進課税によって、無に帰してしまう。だから富裕層は、無気力になって働かなくなる。よってそこに経済発展は生じない。

第二に、共産主義とは、低所得層にとり「努力をしなくても報われる」経済制度である。

彼らには低い税率しか課されず、また所得の再分配によって、生活保護などの社会保障が与えられる。そこには最低限の「経済的安定」がある。

したがって低所得層には、取り立てて働く理由がない。そのため彼らは、無気力になって働かなくなる。こうして、彼らが主力となるような経済発展は、望むべくもなくなる。

翻って、経済の発展に不可欠なのは、まず第一に「おのれの勤労意欲を持続させ、つねに進んで働こうとする人々」である。

これが基本であり、この基本が土台に据えられないなら、そこに経済発展は生じようもない。よって、無気力な人々を産出しつづける共産主義に、経済発展は無縁ということになるだろう。

これはまさに「サルにでも分かる経済学」と言える。だからこそ、私のような低能な人間にも分かったのである。

それが分からない人たち

上記のことを理解できれば、誰であれ、共産主義になど、絶対に近づかないだろう。

それこそ虚心坦懐になって、自分の心に照らし合わせれば、誰にだって分かるはずだからである。加藤氏（ あるいは心理学者 ）が言っていることが、真実であることは。

ならば、共産主義のシンパとは、知力的にどういった人たちなのか。

大変言いづらいことではある。

しかし単純な結論を出してしまえば、彼らは、あの長大な『資本論』は読破できても、あの三行たらずの文章は、理解できない人たちなのだ。

そんな彼らのために、あらためて先の内容を整理しておこう。

共産主義国家では、強度の累進課税によって、不公平な形で、政府が税金を集める。多く持つ者は必要以上に取られ、少ししか持たない者は、必要な分も取られない。

そして政府は、そうして集めた国家財産を、平等に国民に分配する。そうすることで、世帯ごとの経済格差を均そうとする。

それは結局、金持ちにとっては「努力しても報われない世界」であり、貧乏人にとっては「努力しなくても報われる世界」である。

このような世界にあっては、人はどうあっても、無気力に陥らずにはいられない。なぜなら、どちらに転んでも「働いたら損」だからである。

そして、国民が総勢で無気力になり、熱心にも、効率的にも働かなくなったら、である。そんな国では、絶対に経済的発展などは生じない。生じようがない。

あまりにも単純に聞こえるかもしれないが、次のことは、全く疑う余地のない真理だからである。つまり「熱心で効率的な勤労の継続が、経済発展の本道であり、礎である」ということは。

したがって、これまでのことを、逆さまに言い表すことも可能なのだ。

すなわち、経済の発展を求めるならば「努力すれば報われる世界」「努力しなければ報われない世界」を整備すればよい。そうした「当然の対価が与えられる枠組み」を用意すればよい。

さすれば、かかる必勝必罰の道理のなかで、人々は思う存分、自身の勤労の成果を積み重ねることが出来る。適正な報酬が、彼らの労働意欲を賦活させ、かつ持続させるからだ。

そうして結果的に「国家レベルの経済発展」をも、そこから導きだすことが出来るのである。

第７章　共産主義の淵源ー　イエスの罪（ ３ ）

（１）ぶどう園の譬え

発展の逆を語るイエス

確認しておこう。

経済の発展を求めるならば「努力すれば報われる世界」「努力しなければ報われない世界」を整備すればよい。そうした「当然の対価が与えられる枠組み」を用意すればよい。

さすれば、かかる必勝必罰の道理のなかで、人々は思う存分、自身の勤労の成果を積み重ねることが出来る。適正な報酬が、彼らの労働意欲を持続させるからである。

そうして結果的に「国家レベルの経済発展」をも、ここから導きだすことが出来るのである。

これが前章の結論だった。ところが、聖書に書き残されているイエスの言葉は、これとは全く逆のことを指向する。

すなわち彼は、神の国（＝人類のあるべき姿）のあり方として「努力しても報われない」「努力しなくても報われる」世界観を呈示する。

その中でも、とくに際立っている一例が「ぶどう園の労働者たち」の譬えである。

ぶどう園の労働者たち

〔イエスは言う。〕天の国は次のようにたとえられる。

ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。

また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、

「あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう」

と言った。それで、その人たちは出かけて行った。

主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。

五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、

「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」と尋ねると、彼らは、

「誰も雇ってくれないのです」と言った。

主人は彼らに「あなたたちもぶどう園に行きなさい」と言った。

夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、「労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい」と言った。

そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。
最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。
「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。」
主人はその一人に答えた。
「友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。
わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。」

『マタイによる福音書』第二十章より

労働意欲の減衰

イエスが、この譬えに込めた真意は分からない。
ただ、この「ぶどう園の労働者たち」の譬えを率直に読めば、間違いなく分かることがある。
それはここに「努力しても報われない」「努力しなくても報われる」世界観が、まさに文字通りに現出しているということだ。
よって、最初に雇われた労働者たちなど、さぞかしガッカリしたことだろう。
そして彼らは、もうこのブドウ園では働きたくないと思うだろう。たとえ働いたとしても、午後五時からしか働かないだろう。
なぜなら、朝から働いても報われない代わりに、夕方から働いても報われるからである。
しかも、このように考えるのは、なにも、最初に雇われた労働者たちに限ったことではない。このブドウ園の賃金システムを知ってしまった者は、誰だって、午後五時からしか働かなくなる。
それは、どんな人であっても「同じ報酬しか受け取れないならば、なるべく手を抜いておきたい」と考えるからである。それが人間本然の、合理的思考というものだ。

（２）怠け者の天国

低迷する経済活動

では実際に、誰もが、午後五時からしか働かなくなるとしよう。そのときブドウ園では何が起こるだろうか。

そうしてみると必然的に、その日いちにちの「全労働者の総合実働時間」は、きわめて短いものとなる。

となればブドウ園はこの日、普通に考えて想定される収穫高の、十分の一も収穫できなくなるだろう。

これは、一日で済むはずだった仕事が、何日にもわたって、延長されることを意味する。よってこの時点でも、すでに著しく仕事効率が悪い状態といえる。

しかもこの場合、園の多くのブドウは、木に吊るされたままの状態で残り、その本来の旨味は日ごとに褪せていくことになる。

むろん、そんなブドウを、高い値段で買う者などはいない。ブドウは日々廉価になっていく。そのぶん、ブドウ園の収益も、格段に落ち込んでいく。

そうだとすれば、イエスの倫理が呼び込むのは「経済活動の低迷」に他ならないことになる。それが、イエスが是とする「神の国の労働倫理」の必然的な帰結である。

結局、怠け者の天国は、経済的には、貧窮を呼び込まざるを得ないということだ。

働くのが嫌いなキリギリス型芸術家

これはどういうことなのだろう。イエス自身がプロレタリアートだから、このような「怠け者の天国」を肯定してしまったのだろうか。

私などは、率直に「そうかもしれない」と言いたくなる。キリギリス型の芸術家であるイエスが、その青年期に、ただ「食うためだけのアルバイト」に従事している――そんな情景を思い浮かべるとである。

ここで言うアルバイトとは、イエスの家の稼業である「大工」仕事のことだ。

というのも、そうした状況下にあっては、キリギリス型の芸術家は、次のような気持ちを湧出せざるを得なくなるからだ。

「なんで、こんな事（＝仕事）をしなくちゃいけないんだ！」

「もう、こんな事していたくない！」

「時間がもったいない。俺には芸術活動という本業があるというのに！」

もしも、青年期のイエスに、こうした気持ちがあったとすれば、である。それは少なくとも、彼の「労働に対する考え方」をいびつにさせる、その潜在的な要因にはなり得ただろう。

つまり、心のどこかで「労働を軽くみる」とか「労働を侮蔑的にみる」といったような。

共産主義の淵源であるイエス

いや、そうではない。「ぶどう園の労働者たち」の譬えには、もっと深い、別の真理が隠されているのだ、と言う人がいるかも分からない。

事実そうなのかもしれない。そうでないと断言することは、私にも出来ない。

しかし確実に言えることがある。それは、「ぶどう園の労働者たち」の譬えのような考え方が、のちの共産主義思想の「淵源」には、なったであろう事である。

つまり、共産主義を信奉した者たちの心には、新約聖書を通して、間違いなく「努力してもしなくても、報酬は一律にすべき」という考えが、流れ込んでいるように思えるのだ。

そして、共産主義者たちにあっては、上記のようなイエスの考えが「自分らの思想を肯定的に捉えるための後ろ盾」として機能したことだろう。そうしたことも、容易に想像できる。

なにしろ、神の子である、偉大なるイエス・キリストが、まさに共産主義の精髄を語っているのだ。

そうであれば、あとに続く者たちの気持ちにも、格段の「はりあい」や「やる気」が出てくることだろう。

これは、意図したか意図しなかったかに関わらず、イエスの罪ではないだろうか。昨今の共産主義の隆盛、そしてその共産主義の貧しさを「悪」とすればである。

（３）旧約と新約の経済理念

旧約聖書とイエスの不整合

イエスは、自分のことを律法（旧約聖書）の完成者だと語った。

私が来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。〔私が来たのは律法を〕廃止するためではなく、完成するためにである（マタイ）。

しかし、実際には、イエスの教えは、律法の内容と、かなりの不整合を起こしている。そのように言わざるを得ない。

そうなった理由は明瞭だ。

まず律法の教えが、主に「自我の確立」の座標に集中していること。それに対して、イエスの教えが、主に「アルベド」の座標に集中していることである。

つまり律法とイエスの教えとでは、その拠って立つ座標が異なるのである。

とはいえ私は、本書の第２章で「イエスの潜在能力はルベディアンにあたっている。しかし、イエスの教説はアルベディアン的である」という話をした。

このことを踏まえて考えると、私は次のようなことを思わずにはいられない。

「イエスが、その教説においても、ルベディアンであったなら良かったのに。そうすれば、きっと彼の教えは、律法との不整合を起こさずに済んだだろうに」

と、このように、少し悔しく思うのである。

イエスの掌からこぼれた教え

そのように私が悔しくなる気持ちは、福音書シリーズの「ヘルメスの杖」を読めば、皆さんも、簡単に理解できるだろう。この「ヘルメスの杖」とは、第二福音書と、第三福音書のことである。

そこでは明確な「ルベドの教え」が説かれている。そして、そのルベドの教えの中では、自我の確立（座標５）と、アルベド（座標９）は、完全に有機的なつながりを保っている。

しかしイエスは、その教説においては、ほとんどアルベディアンの立場を貫いていた。彼は「復活の奇跡」と「宗教的感化力」を含めれば、たしかにルベディアンであったのだが……

そして、残念なことながら、アルベドの器は、ルベドの器よりも、明らかにずっと小さいのだ。

そのため「律法の精神」の幾ばくかは、イエスの掌から、砂のように零れ落ちてしまっている。

そして、この落ちてしまった分の精神が、くだんの不整合を生んでしまったのだ。律法と、イエスの教えとの狭間に。

このようにして生じた不整合は、両者の経済倫理のなかに、最も色濃く表れている。それが私の見解である。

すでに述べたように、イエスの経済倫理には、かの共産主義に収斂していく指向性が見られる。

それに対して、旧約（ 律法 ）の経済倫理は、最終的に「契約の遵守」に行きつく。

というのも、旧約聖書とは、まさに契約の物語だからである。

もちろん、神と人間の契約に関しては、少しばかり話が変わってこよう。

しかし、人間同士の契約に話を限れば、その内容は、いわゆる「ギブ・アンド・テイク」である。

そして、それは結局「契約者同士の『公平な関係』を保持する」という理念に行き着くだろう。

イエスの言い分

この点、イエスがその譬えで登場させた、ブドウ園の主人は、明らかに公平な人物ではない。

もっと正確に言えば、労働者の側から見るかぎり、かのブドウ園の主人は、「公平な対応をしている人物」とは到底感じられない。いくら、この主人から、

「お前たちに、最初に約束した賃金は、ちゃんと支払っているじゃないか」

という正論を言われてもである。

労働者たちの心は、そこに大きな不公平を感じずにはいられないのだ。

むろん、イエスにも言い分はあろう。「これは不公平ではない。アルベドの『無限・永遠』の中では、たしかに全ての魂は、そのどれもが平等に存在しているのだから」と。

まことにその通りである。というのも、アルベドの中では、全ての魂が「永遠」を持っているからだ。そのため、そこでは各魂の「価値の差異」が、完全にこなれて、均されてしまう。

逆に言うと「各魂の価値の差異」などというものは、有限な時間的区切りの中で、一時的に、仮象として、現れるものでしかないのである。

永遠の世界では、そんなものは意味をなさない。

たとえば「一年生」とか「六年生」などという差異が意味をなすのは、ある「年度」のみであろう。それこそ「一時的な仮象」に過ぎない。

大人になってしまえば、しばらくずっと誰もが「大人」でしかない。

要するに、アルベドにおける「永遠の相」の中では、人類すべてが大人であり、人類のすべてがアルベディアン足りうる、ということなのだ。

たとえ現実の世界にあっては、人類の大部分が、まだまだ学生のように、未成熟な魂たちであったとしても、である。

かくして、アルベドにおいては、すべての魂は平等である。そして「ゆえに賃金も平等」という考えが、イエスの経済倫理に反映されている。

しかし、それは飽くまでも、高次な形而上（ 霊的 ）世界における真実である。物質的な経済圏では、決して、そのままで通用できるものではない。

こと経済に限れば、この低次な物質世界に最も相応しいのは、やはり低次な座標における倫理である。それは座標９の「アルベドの魂の倫理」ではなく、座標５の「旧約の経済倫理」である。

ブドウ園の主人が、旧約の倫理を持っていたら

ブドウ園の譬えで、かかる話を展開するならば、次のようになるだろう。

そこで旧約の経済倫理を働かせるとすれば、ブドウ園の主人は、差異のある「公平な給与」を払うことだろう。労働者たちに、各々の労働時間と仕事能力を考慮してあげてである。

具体的に言えば「朝から働いていた労働者には、高給を与える」。

それに対して「夕方から働き始めた労働者には、薄給しか与えない」ということだ。

要は、労働量によって、主人からもらえる給与に、差額が生じるということである。これに能力差に応じた賞与が付加されれば、その公平さは、さらに申し分ないものとなるだろう。

それによって、イエス的な平等性は崩れるだろう。しかし旧約的な公平性は守られる。

そして、公平であることは「努力すれば報われる」「努力しなければ報われない」という、あの図式を満たすことになる。

経済との相性

ということは「人々が経済的に発展するためには、イエス的倫理よりも、旧約的な倫理を用いたほうが有効である」ということだ。旧約、つまりユダヤ教の倫理を、である。

事実、ユダヤ資本やユダヤ人の富豪たちは、現在においても、世界経済の中枢に君臨している。

たとえば、ビルゲイツはユダヤ人の両親に育てられたし、マイケル・ブルームバーグ（ 実業家、政治家 ）の両親もユダヤ人だ。そして言うまでもなく彼らは、世界屈指の大金持ちである。

もっとも、ユダヤ人たちが、自ら望んでその地位に就いたのかは分からない。

というのも、キリスト教の狭窄的な教義が、ユダヤ人たちを金融業（ 高利貸し ）の中に、無理やり押し込んだのは、歴史上の事実だからだ。

しかも、その「高利貸しとしてのユダヤ人」の姿は、『ベニスの商人』のシャイロックよろしく、クリスチャンから「金銭欲本位の人間」として徹底的に侮蔑された。

しかしながら、その利子収入は、たしかにユダヤ資本の、その大本の財源となっただろう。

その財源を使って、ユダヤ人たちは、資本主義経済の市場を創った。するとそこは「契約思想の民」であるユダヤ人にとって、自分たちの適性を発揮するための「最良の場」となった。

とどのつまり彼らは、クリスチャンに押し込まれたフィールドで、自分たちの適性を自在に開花させたのである。

彼らは、そこで目一杯に、自分たちの能力の翼を伸ばし広げた。その結果としてユダヤ人たちは、やがて「世界的な巨大富豪」ともなったのである。

プロテスタントの「旧約に還れ」

キリスト教の圏内で話をするならば、私たちは、プロテスタントに注目すればよい。なぜならプロテスタント理念の一部は、確実に「旧約に還れ」だったからである。

ここに近代以降のキリスト教と、旧約の経済倫理との強い結びつきがある。

それは、ルターの段階では、まだ孵化していない卵程度のものだったろう。だが、カルヴァンの段階になると、はや旧約的な勤労精神にまで育くまれている。

あとはもう、マックス・ウェーバーの言説に沿って考えればいい。

つまり、プロテスタントの禁欲的な勤労倫理が、やがて現代的な「資本主義の精神」へと引き継がれていくのだ。

そして、その結果として、ワスプ（ WASP ＝アングロサクソン系の、白人で、プロテスタント教徒であるアメリカ人 ）の経済的成功が訪れることになる。

結局は、一方に「共産主義における、貧しさの本尊」としての「イエス」がある。そしてもう一方に「資本主義における、豊かさの本尊」としての「旧約聖書」があるということである。

それにしても不思議ではある。生前のイエスが繰り返し読んでいた本があるとすれば、その筆頭に挙げるべきは、他のどんな書物よりも「旧約聖書」であったからだ。

ならば彼は、そこから資本主義につながる、公平性を学べたはずなのである。

しかしイエスは、それを学べなかった。いや学ぼうとしなかった。そのように考えざるを得ない。

その点を整理するとこうなる。

つまり公平な経済倫理は、旧約聖書に、確かに書かれていた。けれども、それを読むイエスの性向と関心は、あまりにも、それとは異なる方面に向いていたのだ。

かかるイエスの性向とは、公平であるよりも、美しい自己犠牲な愛に惹かれる性質だった。

そしてイエスの関心とは、わき目も振れないほどの「芸術性への忠節」だった。そういうことである。

第８章　イエスへの判決

（１）意味なき貧しさ

清貧の価値

貧しい人々は、幸いである、
神の国はあなたがたのものである。
今飢えている人々は、幸いである。
あなたがたは満たされる。

これは『ルカによる福音書』の一節である。いわゆる「山上の垂訓」の一部であり「貧しさと豊かさ」、あるいは「欠如と補填」について語ったイエスの言葉だ。

そのように、貧しい人々を見れば「彼らを豊かにしてあげたい」と思うのが、救済者（キリスト）としての、自然な感情だろう。

そうであるならば、イエス・キリストは、富を生みだす教えをこそ、説くべきだった。

しかし、これまでの考察からも分かるとおり、イエスはそれをしなかった。もちろんクリスチャンは、これに次のような反論をすることが出来るだろう。

「物質的な豊かさの中では、人は神を忘れてしまう。貧しさの中で、神に向き合えることこそが『満たされる』ということである。またそれが『豊かさ』でもある。

イエスが言う幸いとは、そのことを指しているのだ」

こういう論法は、たしかに成立する。間違ってもいない。私自身も、個人的な好みとしては、心のどこかで「清貧というのも悪くない」と思っている。

けれども、財力とは、社会的な影響力に換算しうるものである。

よって、もし彼が善良であるならば、彼が貧乏である場合より、彼が金持ちである時のほうが「社会倫理的にみて、よほど健全」ということになる。

というのも、金持ちである場合のほうが、貧乏である時よりも、よほど社会に、プラスの貢献をすることが出来るからだ。

何となれば彼は、新たな雇用を作り出すことが出来るし、困窮者に物質的な寄付をすることだって出来るのだ。

神なき貧しさ

それにである。現代における共産主義国の「貧しさ」の中にあっては、かの清貧ですら、その意味を失ってしまうのだ。

というのも、そこでは、どれほど貧しくなったとしても、決して神に向かい合うことは出来ないからだ。なぜならマルキシズムとは、無神論を基盤とする経済学だからである。

神がいない設定（ 無神論 ）のなかで、神に向かいあうことが出来ないのは当然であろう。

しかもそこにあるのは、明らかに神を憎んでいるような、ほとんど攻撃的なまでの無神論である。

つまりそれは「神への無関心からくる無神論」というのではないのだ。それよりは、まるで神を抹殺したいかのような、一種の憎悪を感じさせる無神論なのである。

ここに私は、マルクスを背後から操る、悪魔たちの本心を見るような気がする。

それはともかく、こうした「貧しさと無神論が併存している世界」であっても、イエスは人々に「神的な幸い」を語れるのだろうか。

さすがのイエスであっても、それは無理なのではないだろうか。

すでに現実問題として、共産主義国の底辺で喘いでいる人々は「どこにも救いがない貧しさ」に覆いつくされているのではないだろうか。

そこには経済的にも、宗教的にも「幸い」はないのではないだろうか。

すでに見たように、平等を旨とする共産主義には、富を生み出すのに不可欠な「公平性の理論」が欠如している。

そこにあるのは「努力しても報われない理論」と「努力しなくても報われる理論」のみだ。それらは、人々の無気力と貧しさを、喚起する機能しか持っていない。

しかも皮肉なことには、これが、イエスの教えを種として成長した、経済的な果実なのである。私たちはそのように言わざるを得ない。

それが紛れもない事実であることを、私たちはこれまで「イエスの罪」として検証してきたからである。

歪められたイエスの教え

もっとも、イエスの教えは、マルクスによって、相当大きく歪められたとは言える。

それというのも、マルクス経済学は、イエスの自己犠牲的精神（ ＝愛 ）を「貧者による財産の収奪」へとすり替えてしまったからだ。

つまりイエスの「与える精神」は、マルクスによって「奪う精神」に変えられてしまったのだ。強度の累進課税という手段によって。

これはマルクス流の、実に汚いロジックの使い方である。そしてそれが、共産主義国の情景を、きわめて陰惨なものにしてしまった。

つまり、かつてのイエスの愛は、その気配も感じられないほど徹底的に、別種のもの（ 収奪 ）へと転換させられてしまったのである。

したがって私も、イエスの罪科から、その「マルクスによる歪曲分」を差し引くことに異論はない。この部分に関しては、イエスは被害者ですらあろう。

しかし、それでもなお私は、イエスの教えには誤りがあると思う。そして、その誤り

は、そのままイエスの「重罪」になっていると思う。
　そう、イエスの「共産主義を生みだしうるマインド」は、それ自体でもう、紛れもない「重罪」なのである。

教会の罪

　もっとも、イエスが人間であるならば、彼が過誤を犯すことは当然のことである。人間は誰であっても、誤りや過ちを繰り返しながら生きていくのだから。
　まことに人間というものは、そのような「愚かな生き物」たらざるを得ない。
　ところが教会は、そんな人間であるイエスに「無原罪」という重荷を与えてしまった。
　すなわちイエスに「処女より生まれた、原罪を受けつがない者」というレッテルを与えてしまったのである。
　具体的に言えば、マタイやルカが聖書に、そのような教義の根拠となる「処女懐妊」の物語を書いてしまったのだ。
　そして、これによって教会は、イエスを「裸の王様」に仕立て上げてしまった。つまり決して過ちを犯さない「はず」の、非人間的な人間に。
　これは明らかに「教会の罪」である。イエスの意思は、なんら働いていない。この教会の罪に関しては、後段の然るべき時に詳らかにするとしよう。

罪の清算

　ここでは、それに先だって、イエス自身の罪に関して、判決を下しておきたいと思う。
　イエスの罪とは、もちろん「共産主義を生みだすマインド」のことである。
　そしてイエスは、福音書の中でこう言っている。「木の良し悪しは、その結ぶ実で分かる」と。
　しかるに、現代の共産主義は、明らかに「悪い実」であると言わざるを得ない。それこそ、経済的にも、宗教的にも、である。
　ということは、その悪い実を結実させた幹、あるいは幹の根元にあたるイエスもまた「悪かった」のである。
　かつてイエスが語った経済理論は、率直に言って間違いだった。いたらぬ稚拙な論説であり、無知なる者の軽率な言葉だった。それは過誤であり、イエスの罪科だった。
　私は、イエスに成り代わって、この罪を率直に告白する。いや、これまでも告白し続けてきた。そして、その責任をとる形で、キリスト教に引導を渡すのが、私の役割である。
　だが、それを果たす前に、どうしても言っておかなければならないことがある。それは「今も共産主義を奉じている人々」に対する直接的なメッセージである。

（２）マルキストへのメッセージ

無神論の誤り

マルキストたちよ、共産主義者たちよ、
あなた方が奉じる、その考え方は、
神の目から見て、
明らかに間違っている。
私は、そのように言わざるを得ない。

その多くの誤りのうちから、
まず無神論と唯物論について語ろう。

神は確かにおられる。
そしてキリストである私は、
「人の子となった神」である。
それが、確かにここにいる。
よって単純明快に、
無神論は誤りである。

聖霊は、今も働き続けている。
本書を書かせているのは聖霊である。
したがってあなたは、
今まさに、聖霊が生きて働く姿を、
自身の目によって、
直に追っているのだ。
よって唯物論という、
物質や物体しか存在しないという、
灰色に乾いた理論は、
現象から見て誤りということになる。

低劣な経済学

また、「ブルジョアジーたちが、
プロレタリアートから
搾取を行っている」
というマルクスの決めつけは、
自分自身では「豊かさを生む経済学」
を、どうしても
産出することが出来なかった、
憐れむべき小人の、
欺瞞に満ちた、幼稚な経済学である。
よって、とうの昔から、
マルクス経済学は破綻している。

たしかに、労働組合や生活保護など、
マルクスの思想が優しく、弱者への
労りとなった面は否定できない。
だが、そのマルクスの恵みは、
現代社会においては、ずっと以前から、
資本主義社会の中にちゃんと、
制度として、浸透しているではないか。

また、株式会社という形態によって、
数多くの「社長」が量産される、
現代の社会システムにおいては、
ブルジョアジーとプロレタリアートの、
その階級を隔てる垣根もまた、
ほとんど崩れてしまっている。

したがって、マルクス主義の、
現代的な意義というものは、もうない。
しかも、
優しげな「弱者への労り」すらも、
その弱者がいつか、
経済的強者となれば、
もはや「搾取者」という、
悪者としてしか
扱ってもらえないという、
そんな狭量な視野のもとに
行われるのだ。

であれば、そこに一体、

　どれほどの
「成長の意義」があるというのか。
　そんなものはありはしないではないか。
　ならば共産主義は結局、
　弱者を弱者のままにする、
　閉じられた負の効能しか、
　生まないではないか。

　現代における共産主義からは、
　私の目には、もはや嫉妬と狭量という、
　悪魔たちの道徳律しか見て取れない。
　そして、それは当然のこと、
　神の心から、遠く離れた倫理である。

キリストを責めよ

　だからマルキストたちよ、
　急いで、その世界観から離れなさい。
「離れるために、
　誰かに責任をなすり付けたい」
　と言うのであれば、
　共産主義の淵源に立っている、
　かのイエス・キリストを責めなさい。
　それが憚れるというのなら、
　他でもない、この私を責めなさい。

　なぜなら私は、イエス・キリストと、
「共産主義の淵源となる罪」を、
　その心の性質において共有するからだ。
　それはつまり、
　自分の本性を省みるかぎり、
　もし、あの時代に生まれていたならば、
　私もまた、イエスと全く同じ考えを、
　この心に抱いたであろう
　という事である。

　だから私は、この一身に、
　あなたがたの怨嗟の声を受け止めよう。
　あなた方からの辱めを甘受しもしよう。

それだから、お願いだから、
マルキストたちよ、
今こそ、共産主義から離れなさい。

この切実なる声を聞いてほしい。
なぜなら、この声を聞かなければ、
最後の審判について書かれた、
あの恐ろしい予言が、そのままの形で、
あなた方の身に成就してしまうからだ。

『マタイによる福音書』から

「すべての国の民が
その前に集められると、
羊飼いが羊と山羊を分けるように、
彼らをより分け、
羊を右に、山羊を左に置く。

そこで、王は右側にいる人たちに言う。
『さあ、私の父に祝福された人たち、
天地創造の時からお前たちのために
用意されている国を受け継ぎなさい』

それから、
王は左側にいる人たちにも言う。
『呪われた者ども、わたしから離れ去り、
悪魔とその手下のために用意してある
永遠の火に入れ』

（３）ハルマゲドンの最終兵器

羊飼いとしてのイエス

ここでは、前節の終わりで紹介した『マタイによる福音書』の、次の言葉について考察を行いたいと思う。

「すべての国の民が
その前に集められると、
羊飼いが羊と山羊を分けるように、
彼らをより分け、
羊を右に、山羊を左に置く」

ときにイエスは、自分のことを「羊飼い」と呼んだ。すなわち福音書においてイエスは「私は良い羊飼いである」と言っているのである。

羊飼い――つまり彼は、山羊ではなく、羊を飼う者である。それゆえ羊は、寓意的に「イエスの陣営に属する者」を指している。さらに換言すれば、羊は「神の国の住人」ということにもなるだろう。

一方の山羊は、そこに「山」の字が付いていることからも分かるとおり、山野を駆け回っている、野生動物のシンボルである。

たしかに山羊の見た目は、羊と酷似している。しかしこの二種の動物は、じつは属のレベルで異なる生物体でもあるのだ。

山羊たちは、基本的に、飼い主を持たない存在である。だから、良い羊飼いであるイエスがつくった「囲い」からも逸脱してしまう。

要するに「山羊たちは、神の国の住人ではない」というわけだ。

そしてイエスは、自分の眷属（羊）を右に、自分の敵対者（山羊）を左に振り分けた。その上でイエスは、今度は自分を「王」になぞらえて次のように言う。

そこで、王は右側にいる人たち（羊の人々）に言う。
『さあ、私の父に祝福された人たち、
天地創造の時からお前たちのために
用意されている国を受け継ぎなさい』

このように、右側の羊たちには、神の国での居住権が与えられる。それに対して、左側の山羊たちには、地獄での苦しみが与えられる。無理もない、彼らは「悪魔とその手下」であるからだ。

それから、王は左側にいる人たち（ 山羊の人々 ）にも言う。
『呪われた者ども、わたしから離れ去り、
悪魔とその手下のために用意してある
永遠の火に入れ』

イエスによれば、これが「終わりの時」に起こることだという。

現代における左

私は「左」という言葉を、左翼、つまり「共産主義的な勢力」として解釈している。
もっとも「左翼」という言葉が生まれたのは一七八九年のことだ。フランス革命の真っただ中の議会で「右翼」と「左翼」という言葉が生じたのである。
よって二千年前のイエスの時代には、左翼という言葉は、影も形もなかった。
そうであるのにも関わらず、私は今この文脈においても、「左」という言葉を、なんら修正することなく、ストレートに使うことが出来る。
となると、ひょっとしたらここには、宿命的で神的な符号が、隠されているのかもしれない。
それはさておき、現代日本で左翼と言えば、マスコミの大勢と、共産党や社民党、立憲民主党といった政治政党。あとは日教組のような教育組織や、労働組合などが、それに該当する。
そして左とは、先の『マタイによる福音書』からの引用からすれば「悪魔とその手下」である。しかして日本の左翼は、たしかに「悪魔とその手先」に当たっているように見える。
なぜなら彼らは、無神論的、唯物論的思潮によって、日本に現れた「宗教的な光」を吹き消そうとしているからである。
これはまさに、神の計画の成就を、阻害しようという働きに他ならない。
そして当然、神と敵対する者こそが、サタン（ 悪魔 ）なのである。
実際、この時代の日本に「神の国」を打ち立てようというのが、神の計画である。そのためにこそ、この時代に再臨のキリストが現れ、再誕の仏陀が現れたのである。
ノストラダムスの予言が明示する、このあたりの事情については、第七福音書『インターレグナム』を参照していただきたい。

悪魔たちの戦術

ところで悪魔は、つねに「暗躍」するものである。

しかも、悪魔としての格が上がるほどに、彼らは、自分自身の姿を、出来るだけ目立たせないよう努めるようになる。

というのも――格が上がるほどに際立つ――彼らの醜い姿は、それが目立ち、露出するほどに、彼らの活動を「やりづらく」するからだ。

それはそうだろう。人はさすがに、一目で「悪しきもの」と見てとれる者の言うことはきかない。その場合、恐怖感と忌避とが先に立ってしまうからである。

だから悪魔たちは、極力、人間たちに自分の姿を見せないようにする。もともと彼らの目的は、巧緻をもって「人間に、自分たちの言うことをきかせること」なのだから。

そんな悪魔たちにとっては、「唯物論」という思想が、戦術的道具（ 武器 ）として、はなはだ有効なものとなる。これ以上に優れた戦術アイテムなどない、というほどにも。

というのも、それは彼らにとって恰好の「隠れ蓑」となるからなのだ。

さしあたって、悪魔たちが霊の一種であることは間違いない。悪魔とは、とどのつまり悪霊たちの親玉である。

ゆえに「世界には物質だけがあって、霊など存在しない」という考え方は、悪魔という「霊」にとっての、巧妙なステルス（ 隠密 ）装置となる。

すなわち、霊がないなら、彼ら悪魔もまた、存在しないはずなのである。

そしてもう一つ。悪魔たちにとって、神は最大の敵である。それゆえ彼らは、神を抹殺するかのような「無神論」を説いた。しかも、それを「科学的思考」と呼んだ。

この世界には、実際の知性には乏しいものの、自分を知的に見てもらいたいという人々は、あまたといる。それが現状である。

そんな人々に対して、悪魔たちは次のように囁くのだ。

「ならば、神なんかいないと言っておけ。そうやって無神論を奉じておけば、君は周囲から知的に見られるぞ。それが科学的な姿勢というものだからだ。実際、科学者はみんな無神論者ではないか」

このような暗く甘い言葉によって、悪魔たちは「自分で真理を求める意欲を持たない、無知なる者たち」の篭絡を図ったのである。

それにより世界には、数多くの無神論者が溢れかえるようになった。

ハルマゲドンの只中

こうして、無宗教という皮をかぶった、その実まぎれもない「盲信的な宗教」が成立する。

すなわち、隠密状態の悪魔が本尊。唯物論と無神論がドグマ（ 教義 ）という、立派に体系化された新興宗教がである。

その新興宗教の名を「マルクス主義」という。これはまさしく、悪魔たちが暗躍して

創った邪宗教と言えよう。

そして、この邪教を国教とする、シナや北朝鮮が、日本への布教（侵略）を狙っているのである。

かつ、日本国内の左翼勢力が、このシナや北朝鮮の侵略を、たやすいものにしようとしている。つまり外患と内憂が呼応している。

たとえば、以前沖縄の知事だった翁長氏など、まさにその内憂の典型であっただろう。

彼がしていたことは、もはや、売国行為以外の何物でもなかった。

売国といえば、靖国参拝をいちいちシナに「報告」する、朝日毎日系のマスコミも同罪である。そして、その下支えをする、日教組や朝日岩波系の知識人たちもまた同じだ。

そして、そうした悪魔的な風潮の中で、私は真なる宗教の教えを説いている。キリスト再臨の理を説いている。

それは言うなれば、この日本を舞台にして、いま神と悪魔が戦争を起こしている、ということである。だから私は、今こそ声を張り上げよう。

無神論を誇る人々よ、あなた方は、自分たちが、今すでに悪魔たちの眷属になっていることを知りなさい！

霊などないと決めつける人々よ、あなた方は、自分たちが、今すでに悪魔たちの手先となっていることを知りなさい！

無神論とは中立の立場ではない。

それは「左の山羊」の立場に他ならない。それは「悪魔とその手下」の立場に他ならない。

君よ、あなたよ、心を改めよ。もう馬鹿なことをするな！　このハルマゲドン（最終戦争）において「悪魔側」などに加わってどうしようというのだ！

イエスもろとも、という最終兵器

私は羊飼いとして、右の勢力を束ねる者として、再臨のキリストとして言おう。

「耳あるものは聴きなさい。私はいま、ハルマゲドンにおける勝利を確定する。そのための最終兵器とするべく、ここに、この『第六福音書』を上梓する」

断腸の思いではある。が、それでも私は、二千年前に生きたイエス・キリストをいま断罪する。それによって、この「第六福音書」を、マルクス主義、共産主義に対する「最終兵器」にする。

そして、この武器によって、敵の深奥にある支柱（＝イエス・キリスト）を突き崩す。

そうして「イエスもろとも」マルクス主義、共産主義を葬ろうと思う。

というのも、この悪魔的な主義主張を、こうまで延命させたのは、他ならぬ「イエスの過誤」だからである。

そう、私たちは言うしかないのだ、

「イエスのマインドが生き続ければ、マルクス主義も生き続けるだろう。キリスト教が生き残れば、共産主義も生き残るだろう」と。

とすればである。敵を粉砕するためには、私たちは、イエスとキリスト教をも、同時に粉砕しなければならないのだ。

つまり、この破壊力をもってこそ、初めてそれはマルクス主義、共産主義に対する「最終兵器」たりうるのである。

イエス最大の自己犠牲

イエスの自己犠牲は美しい。神のように美しい。

しかし、その自己犠牲的なる愛が、かの経済的無知に結びついたとき、彼の愛の幾ばくかが、のちの大悲劇（ ＝共産主義の成立 ）の基となった。

ここにイエスの過誤がある。彼の重い罪がある。

だからイエスは、私に願ったのだ。「どうか私の『人間としての過誤』を糺してほしい」と。「それにより自分が『罪人』と呼ばれるようになるとしても」と。

イエスは、そうまでしても、この「日本という光」を守りたいと思っている。

イエス的に言えば「たとえもう一度、罪人として十字架に架けられても」である。そうまでしても、イエスは日本を、光を守ろうとしている。

たいへん皮肉なことではあるが、ここにこそ、最も意義ぶかい「イエスの自己犠牲」の姿があると言ってよいだろう。

けれども確かに、この日本には、そうまでしても守る価値がある。いま日本という国は、まさしく、この時代における宗教的な光源となっているのである。ここは神の国の中心なのである。

ゆえに決して、左から吹く風などによって、この光が吹き消されてはならない。

むしろ「赤い男（ マルキスト ）」こそが「底なしの穴で消滅」しなければならないのである。

天空から降臨する新しい指導者が
人々をひとつにし
すべての党派は滅び
また新たに生まれ変わる
高位の聖職者はより高い支配に従う
天使たちの喜びの姿が見える
赤い男は底なしの穴で消滅する

これはノストラダムスの予言である。

この予言は、どうしても成就されなければならないのだ。私たちは、右側から光源を支えなければならない。そうして「左側」を底なしの穴に沈めなければならない。

（４）中道のゆえに右になる

左側から見える景色

ただし私たちは、左と対立する「右」という言葉を、短絡的に「右翼」と解釈する必要は、全然ない。

それというのも、この日本では、すでに社会全体が、著しく左寄りに傾斜しているからだ。そうした偏向性が、日本の国体として「既存」の状態になっている。

なんと言っても、日本国民にあっては、小学校に入学したときから、早くも日教組による左傾洗脳が始まるのだ。そうであれば、国民全体が、刷り込みのレベルで左傾化するのも当然だろう。

親として子供の教材を見たとき、私にもそれがよく分かった。

また学校を卒業すれば、今度はマスコミが、日常的に左翼的な見解を押し付けてくる。テレビや新聞による啓蒙（洗脳）は、ひたひたと着実に、私たちの心を蝕んでゆく。

こうした環境に置かれるため、日本国民の視野は、つねに「左側から」のものとなる。

そのため中央（思想的な中道）を歩いている人がいると、その人の軌跡は、日本国民にとっては、どうしても「右寄り」に見えてしまうのである。

したがって「右」とは、俯瞰的に見れば、往々にして「偏向なき者たち」を指す言葉になるのだ。

渡部昇一氏は、自身の著作の中で、次のように言っている。

「右傾化」の問題とは、すでに十分以上に左傾化している人たちの、正常化に対する恐れを示す叫び声である、と見れば本筋を見誤ることはないであろう。

『これで日本の教育は救われる』より

これほど分かりやすい、左翼の「本音」の指摘もないだろう。

本当に「右であること」とは

だから、ここで言うところの「右」とは、ナショナリズムに傾倒し、自国の国益のみを追求する人たちのことでは、決してないのである。

ここで言うところの「右」とは、むしろ次のようなことを、心から弁えている人たちのことを指している。
「大きな世界のなかに『自分たちの国』というものがある。国民は、その地域的特色や、歴史的特色を大事にしなければならない。それは一言で言えば『国体を保守する』ということである。
しかし、自国を尊重するあまり、その気持ちを肥大させること。自国尊重をもって『他国への侵略性』に転換させることは、絶対に許されない。
なぜなら他国にもまた、大切な『保守すべき国体』があるからである」
こうした姿勢の中枢にあるもの。それは、自分と他者の自由を、両立的に尊重しようとする気持ちである。
それは経済的には、自由市場主義、資本主義に結びつくだろうし、政治的には民主主義に結びつくだろう。
そうした陣営に立っているのが、私の言う「右」の人たちである。
もちろん私としては、彼らが神を信じる者であってほしいと望んでいる。
神のもとにある資本主義や、神のもとにある民主主義。そうしたものを志向する心こそが、本来の意味における「右」なのである。
聖書の予言が成就するならば、このような「右の羊」は天国に向かう。それに対して、先に論じた「左の山羊」は地獄に投げ込まれることになる。
だから「左の山羊」にあたる人たちは、今すぐにでも、その人生行路を、右側へと軌道修正してほしい。そうすることで、どうにか「中央道」へと帰還してほしいのだ。
マルクス主義者よ、あるいは、マルクス主義者に操られながら、その操り糸の存在に、気づきもしない人たちよ。
どうか今こそ、真実に気付いてほしい。どうか今こそ「左」を離れてほしい。
そう、山羊であることを否んで、今こそ羊となりなさい。そうしてから、よき羊飼いのもとへと走るのだ。もう時が満ちたのだから。

第９章　教会の罪

（１）非人間的な人間の捏造

罪をもつイエス

第５章から第８章にかけて、私はイエスの経済音痴を罪に定めた。それが現代における悪しき果実、共産主義の種子となったからである。

簡単に振り返ると、次のようなことになるだろう。

放浪的芸術家としての気質と、プロレタリアートとしての、経済的ハンディキャップが、イエスを経済音痴にしてしまった。

そして、それにも関わらず、イエスは、経済についての一家言を残してしまった。

「富める者は、貧しき者に分け与えなくてはならない」

「働いた内容が異なっていても、報酬は平等でなければならない」

こうした姿勢が、後世の一部の人々を迷わせ、その最終的な結実として「共産主義」を生んでしまった。

しかもマルクスによって、共産主義は、無神論、唯物論、無霊魂説を掲げる邪宗教となった。それが現代世界の大半を、神の光とは無縁の、魔的な闇の世界へと落とし入れている。

こうした内容が、だいたい第８章までの概略である。

しかしだ。そのようにイエスが間違いを犯したとしても、それはある意味で当然のことなのだ。

だってイエスは人間なのだから。人は、誤って、間違って当然の生き物なのだから。

そうであれば、聡き人は、イエスに間違いを教えてやればいい。

これに対して「私たちは、イエスが生きている時代に間に合わなかったのだ」と弁解する人があるかもしれない。

それは分かる。むろん場合によっては、イエスの間違いが、イエスの死後に、明らかになることもあるだろう。

だが、そうした場合には、間違いに気づいた者が、その「イエスの負の遺産」を、堅実な論証をもって修正してやればいい。

そして、その修正した見解を教義化して、さらに後世の人々へと、申し送ってやればいい。

誰にでもわかるぐらい、これはいたってシンプル、かつ真っ当な話だろう。

マリアの処女懐妊

だが、誰もそれをしなかった。いや出来なかったのだ。キリスト教圏に住むいかなる人間も、どうしても、それが出来なかったのである。

なぜなら、キリスト教会が成立した初期段階から、そのような考え方をすることは、絶対の禁忌となっていたからだ。

その当時から、すでにイエスは「間違いを犯すはずがない存在」「間違いによって、罪をつくるはずがない存在」ということになっていた。

そのようなイエスの罪過を指摘すれば、キリスト教神学の「筋」が通らなくなってしまうだろう。

ところで、この奇妙な設定の根拠となったのが、聖母マリアによる処女懐妊と、処女降誕である。

つまりは、処女であるマリアが妊娠したことと、その処女マリアが、イエスを出産したということだ。

かかる処女懐妊、処女降誕の記述は、最古の福音書である『マルコによる福音書』にはない。

けれども、その『マルコ』よりも、五年から二十年ほど遅れて成立したと言われている『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』には、すでに記載されている。

それらの福音書において、イエスは「処女マリアが、聖霊のプネウマ（霊風）によって身ごもった子供」ということになっている。

よってイエスは、親から原罪を受けついだ子供ではない。そこでは普通のセックスも、普通の受精も行われていない。

イエスの実父は、あくまでも、遺伝子など持っていない聖霊（神）なのである。

無原罪の御宿り

それでも、話がここまでならば、まだ「残された道」があった。イエスは、母方のルートを通して、人間としての遺伝子を受容できるはずだった。

少なくとも、かの聖母マリアが「人間であること」ばかりは確かなのだから。

さすればイエスは、母マリアからの原罪だけは、受け継ぐことが出来たはずだったのだ。

ところがだ。厄介なことに教会は、その小さな理論的空隙さえも見逃さなかったのである。

教会は一八五四年に「無原罪の御宿り」という新しい教義を採択する。それによって教会は、マリアの履歴に、なかば無理やりな「辻褄あわせ」を執り行った。

つまり教会は「イエスの母であるマリアもまた、誕生の時点から、原罪を持っていなかった」という設定を立てたのだ。

なんでも「神の超自然的な恵み」が、それを可能にしたらしい。さすがは神さまと言うべきなのかもしれないが、私には、到底承服しがたいやり方である。

もちろん、こういう「ご都合主義の万能的な神パワー」を使用すれば、その使用者は、

どんな内容の教義でも作りだせるだろう。

何となれば彼は、キリスト教を根本から作り直すことだって出来るはずだ。

しかしながら、そのような万能のパワーであっても、宗教的な情動（感銘、感動）ばかりは生みださない。その教義は、信者の心を素通りする空虚なものにしかならない。

よって、それは宗教上の「無駄」の部分である。

ともあれ、こうした経緯のもと、イエスは徹底的に「原罪を持たない存在」「罪との関わりを持たない存在」となった。少なくとも、キリスト教の教義上では、そのようなことになったのである。

罪の源泉

あらためて見てみよう。

普通の人間の場合、どうあがいても、その人生のうちで、何らかの過誤を犯さずにはおかれない。それは人間が「原罪」というものを持っているからである。

原罪とは、言わば「どうしても神意に反してしまう傾向性」のようなものである。

その傾向性が、人に間違ったことを行わせ、その過誤が彼のうちに「確定的な罪」を与える。かくて人は罪人となる。

聖書によれば、原罪は、そもそもは、かのアダムとエヴァが生みだしたものである。

彼らはエデンの園にあって「善悪を識る木の実」を食べてしまった。しかも「それを食べてはならぬ」と戒めた神に反抗してである。このとき初めて原罪が生まれた。

そして聖書によれば、その原罪が、現代の人間に至るまで、連綿と遺伝的に伝わっているというのである。

けれどもイエスには、上述したとおり、この原罪が伝わっていない。よってそれは「人間としては」きわめて不自然な事ということになる。

だが神学上では、これはある意味で、仕方がないことなのかもしれない。

というのも、イエスは「その存在本質において、神と一体」ということになっているからだ。いわゆる三位一体の教義で、そのようなことが定められている。

それによれば、父と息子と聖霊――神とイエスと聖霊――は、その本質において同じものなのである。

つまりイエスは、彼自身が神でもあるのだ。それなのに、その同じイエスが「神意に反してしまう傾向性」などを持っていたらどうなるだろう？

当然のこと、その時点で「イエスの存在論の破綻」が起きてしまう。要するに、明白な自己矛盾ということである。

ルベディアンの見識

もっとも私ならば、はなから、そんな不自然な理論は立てない。

私が教義づくりをするならば、まず手始めに、原罪というものを、次のように定義づけるだろう。

すなわち「罪の源泉であるところの『原罪』の正体は、人の心の底に固定されている闇であり、これは虚無と同じものである」と。

そして、その上でこう結論づける。

「この虚無は、神の本質を構成するために不可欠なものである。神とは『無からの創造』だからである。虚無からの存在の創造だからである。

よって、イエスが原罪（ 虚無 ）を持っていたとしても、その三位一体的存在論は、まったく理論破綻することがない」

とまあ、このようにすれば、現実と教義のあいだに、齟齬が生まれることもない。

しかし、これは飽くまでも「ルベディアンの見識」である。

ひるがえって、ルベドどころか、アルベドも知らないキリスト教徒（ キリスト教会員 ）たちに、こうした教義づくりを求められるだろうか。

むろん、それは土台無理な話である。

彼ら教会員に出来たのは、せいぜい神と一体であるイエスから、原罪（ 神意に反する傾向性 ）を引き抜くこと。それによって、三位一体的存在論から、矛盾を取り除くことぐらいだったのだ。

それが物語の形をとったとき「処女降誕によるセックスの排除」というエピソードが生まれたのだろう。つまり教会員の思索は「遺伝による原罪注入の阻止」として結実したわけだ。

嘘をつく義務

そして、これによって自然と、次の結論が導かれた。

すなわち「イエスは原罪を持たないがゆえに、過ちを犯すことがない」。また「過ちを犯さないがゆえに、実際の罪をつくることもない」と。

もしもイエスが一つでも過誤を犯したならば、それは同時に、罪の生起でもある。

無論これは「原罪を持たないイエス」の存在定義と合致しない。それは教会にとって、まかりならないことである。

確認のため、あらためて教会の立場を明確にしておこう。

彼らにしてみれば、イエスは何としても、完全に無過誤の存在でなければならない。

だから、たとえ福音書のなかに、イエスの過誤と思しき記述があったとしても、クリスチャンは絶対に「それは過誤である」とは言ってはならない。そういうことになる。

もっとシンプルに言えば、キリスト教圏においては、「イエスに過誤はない」という、嘘をつく義務が生じるのである。

クリスチャンたちも、福音書を読んだときに、ふと思う時があるのかもしれない。

すなわち、ある場面に対して「これをイエスの過誤としないのは、少し不自然なので

はないか」と。その内心で薄々とは。

しかし彼らは、それを口に出すことは、決して許されないのだ。ただ口に手を当てて黙るべし。それがクリスチャンの「正統的な立場」というものなのだ。

何ともやるせないが、これこそ「裸の王様を、裸と言ってはならない国民」を彷彿とさせる状況ではなかろうか。

事実クリスチャンの誰一人として、歴史というパレードが終わるとき（ ＝現代 ）まで「イエスだって過ちを犯すはずだ」とは言わなかったのである。

そしてこれが、イエスの経済音痴を、何の修正もないままで、後世（ マルクスの時点 ）まで波及させてしまった、その根本の原因なのである。

（２）単性論と変わらぬ両性論

単性論を逃れる

前節で見たように、イエスの経済音痴という罪は「キリスト教の教義を成立させるための欺瞞」に梱包された。つまり「イエスの無原罪」という教義を貫くための欺瞞にである。

そうして、その中身が原型をとどめたままで、後世に譲渡された。

譬えるなら、不水溶性カプセルを飲んだときのように、その中身が、全く溶解しない状態のままで、体外まで届いたわけだ。それをマルクスが受け取ったことになる。

となれば、これはもう、イエスの罪というよりは、よっぽど「教会の罪」である。私たちには、そのような言い方が許されるだろう。

もっとも教会は、さらに明白に、さらに確実に「罪を犯すこと」も出来た。現状よりも悪質な欺瞞を現すことも出来た。

それは今では異端思想として扱われている「単性論」という神学理論によってである。

単性論の論者は言う。

「キリストにおいては、人性は神性に吸収されてしまっている。よってキリストには、神としての性質しかない」

つまりイエスが、単一の「神の性質」しか持っていないから「単性論」であるわけだ。こうした奇妙奇天烈な思想が、四世紀頃、ビザンチン帝国の東の辺境で、広く信じられていたという。

しかし、この「イエス・キリストの単性論」は、教会によって、正式に異端と断じられた。公の場で「それは間違った考え方である」と否定議決されたのである。

そのように教会が否定したことによって、イエスはどうにか「人間としての立場」を保持することが出来た。

これによって、僅かながらイエスに「人間として過誤を犯す可能性」が残されたことになる。

少なくとも、議論の中で「イエスは純粋な神なのだから、そこに過誤が生じるはずがない」という言い方は、出来なくなったと言えるだろう。

カルケドン公会議

歴史的に見ると、単性論は、四五一年の「カルケドン公会議」で否定議決されたことになる。

そして、それと同時に、教会のなかで「キリストの中には、神性と人性が併存する」ということが確認された。これを「両性論」という。

つまりイエスが、神であると同時に人間でもあることが、正式に宣言されたのである。

これは画期的な事だと言える。そのように一部分でも「真に人間である」とすれば、イエスが過誤を犯したとしても、それはむしろ当然のことになるからである。

しかしながら、結局のところ、この両性論は「表面上の取り繕い」「水面をなでる微風」でしかなかった。

というのも、両性論によって人間であると宣言されていても、実質的には、イエスは全然「人間になりきれていない」からである。

だってそうだろう。聖霊によって身ごもり、処女によって出産された人間。罪をつくる因子を除去され、それゆえ過誤を犯すことも無いとされる人間。

そんな者が、本当に、私たちと同じ人間であるのか。人間の名に値する者なのか。私たちは、そのような存在にシンパシーを持てるのか。

こうした疑問に対する答えは、どう考えても「否」となってしまうではないか。

省察が足りない決議

実際問題、処女懐妊、処女降誕のような教義を採択し、それを修正しもしない教会が、どの口をあけて「イエスは人間でもある」と言うのか。

処女懐妊、処女降誕の場面を載せている、マタイとルカの福音書が書かれたのが、ＡＤ八十年代から九十年代。

それに対し、両性論を採択したカルケドン公会議は、ＡＤ四五一年に開催されている。

ということは、すでに「処女懐妊、処女降誕」から、三百年以上の歳月が過ぎている。何とも中途半端な設定で「イエスは人間でもある」と再確認されるまでに、である。

三百年――それは矛盾した教義に修正をかけるには、充分な時間であったのではないか。そう思うのは私だけなのだろうか。

なのに結局、処女懐妊、処女降誕の部分を修正しないままで「イエスは人間である」と決議したキリスト教会。

そのあまりにも省察能力の足りない発言に対し、私には、腹に据えかねるものがある。イエス本人にとっても、これはいい迷惑だろう。

イエスだって、自分が過誤を犯さない人間だなどとは、絶対に考えていなかったと思う。本当に絶対に！

イエスだって、きっと、その生涯に何度もあったのだ。「ついつい過ちを犯してしまう自分」を反省したことは。

どう考えても彼は「わが生涯に、決して過ちなし。誤りなし。罪なし」などと考えられる、そんな傲岸不遜タイプではなかったはずだ。

反対にイエスは、人一倍謙虚な人だったに違いない。とすれば彼は、きっと今なお私

たちに「私だって罪深い、本物の人間なのだ」と言いたいことだろう。

しかし教会は、それを決して許さなかったのである。

（３）イエスの神格化

神格化の犠牲者

すべてはキリスト教会による「イエスの神格化」に原因があったように思われる。

つまり強引な「イエスの神格化」によって、多くの歪みや矛盾が、その教義のなかに残されてしまったように思われるのだ。

では何のために、イエスは神格化されたのか。

たしかに宗教の教祖ともなれば、その存在が神格化されることは、一つの宿命ではあっただろう。

たとえばギリシアの神々は、大昔の、優れた「普通の人間」だったかもしれない。それが後世に神格化されて、ついには神々の姿にまで高められたものと考えられる。

身近な例では、日本の八百万の神々は、かなり高い確率で、そのような神格化を受けたものと思われる。

最近ですら、明治天皇や乃木希典は、神として祀られている。しかし、彼らがもともと人間であったことは、我々にとって周知の事実である。

他にも神格化の例はたくさんある。

仏陀もまた、その生誕時の神話化（天上天下唯我独尊）を免れられなかった。ローマの皇帝たちや日本の天皇たちは、現人神へと高められた。古代エジプトの歴代の王にしても、そうである。

また、いまの北朝鮮に目を向ければ、実に滑稽な「人間の神格化」の現場すら、見ることが出来るだろう。

特異存在に仕立てられたイエス

しかし、イエスの神格化の場合は、少々それらとは事情が異なってくる。

そこには、単なる「素朴な神格化現象」では片づけられない、ある込み入った問題が混入しているように思われるのである。

すなわちイエスの場合は、神格化によって彼を「もう二度と、この世に現れることがない特異存在」へ仕立て上げようとしているように見えるのだ。

そのためにこそ、かの「処女懐妊、処女降誕」のような神話が、イエスの生涯に付与されたように思えるのである。つまりは教会が、

「キリストは一人きり。キリストの代理人は教会のみ。他のキリストは決して存在せず」
という「救いの権能の独占」の図式を護持せんがためにである。
事実この図式を満たすことによって、教会はその権力を唯一化、絶対化することが出来る。
そうして彼らは、キリスト教圏における、指導者としての特権を、独占的に享受することが出来るようになるのである。

寛大な仏教

仏教においては、決してそうではない。
それを証する次の文書などは、私にとっては、衝撃的ですらあった。

仏教では釈迦如来以下多くの仏の存在を説いている。
だから「浄土（＝天国）はたくさんある」と経典に書かれている。星の数ほどではなく、仏の数ほど浄土はある。

瓜生中『仏教入門』より

つまり仏教では、第二の仏陀、第三の仏陀が現れても、一向に差し支えないのだ。仏が増えれば浄土が増える。それだけの話だからだ。
これをキリスト教に焼き直せば、要するに「何人キリストが現れてもいい」ということである。
そういった旨の教えを、仏教では実際に説いている。実に寛大で、実に裡にかなった、実に平和な教えだと思う。

狭量なキリスト教

一方、キリスト教においては、絶対にそんなことは語られない。いや、むしろ彼らは、仏教とは正反対のことを語るのである。
彼らは言う、「イエスは神の独り子であり、キリストは一人だけである」と。
そうやって教会は飽くまでも、第二、第三のキリストが出現することをブロックする。その意向を押し通すためならば、イエスを処女から降誕させることも厭わない。
他方もしもイエスが、父母のセックスによって、普通に生まれてくるような人間であったなら、である。
その場合は、イエスと同じようにして生まれてくる、第二、第三のキリストの出現の

確率も、かなり高まってくるだろう。

しかし、聖霊によって身ごもった処女から生まれてくる「人間」は、きっと現実には現れない。

だから、これを「キリストの出自の条件」とすることによって、まさに教会が望んだとおりに、事が運ぶことになる。

すなわち、頑強なまでに「第二、第三のキリストの出現」がブロックされるわけだ。

自己保存的な企み

多少ばかばかしい気もする。

けれども、そこまで懸命にブロックしなければならないほど、教会にとっては、それは耐えがたい事態だったのだ。自分たちの既得権益を脅かす、第二、第三のキリストの出現という状況は。

つまり教会にとっては、強大な商売敵などは、絶対にお呼びではないのである。

であれば、イエスは一応人間ではあっても、その実、遠く「人間離れ」していてくれたほうが、教会にとっては、よほど都合がよい。そこにイエスの神格化の意義もあった訳である。

そして、以上述べてきたことが事実であったならばだ。

実に、この教会という組織の根幹には、自己犠牲的な愛などは、欠片ほども見出せない。見えるのは、自己保存的な、まことに身勝手な暗い企みだけである。

保身、自己愛、権力の独占。かの自己犠牲とは逆の方向を向いている心象ばかりが、ここには散乱している。

芸術家イエスが、このような教会のあり方を見たら、どう思うだろう。

きっと彼は、そこに「醜さ」を感じることだろう。自己保存に傾いた「精神の不格好さ」は、美を求める芸術家であるイエスが、最も嫌ったものに他ならないからである。

そんなイエスがいま現存していたならば、彼は自分の教会から、その全ての構成員たちを追い出すに違いない。かつて両替商を、エルサレムの神殿から追い出した時のように。

まことに、その神に捧げられた空間を「醜さ」から清めるために。

第 10 章　教会への判決

（１）異端の撲滅

耳障りな正論

教会は実質的に、イエスを人間以外のものにしてしまった。そして、それによって人間の世界から「第二、第三のキリスト出現」をブロックすることに成功したのである。

この教会のやり方は、自然と「異端者の撲滅」という暴挙にもつながっていく。それは異端の多くが「←」という「新たなキリスト出現につながるベクトル」を内包していたからである。

「←」――これは教会にとって、どこまで行っても受け入れられない「最も厄介な因子」と言わざるを得ない。

なぜなら「←」というベクトルは、悟りによってつねに「第二、第三のキリスト」を生みだす温床となるからである。

もちろんこの私「再臨のキリスト」もまた、そのような「←」の中から生まれたのである。悟りの梯子を登り、ルベドの悟りによって、私はキリストになった。

教会にとっては最悪の獣である私は、そのようにして、この世界で産声を上げたのである。

だから、その温床が温床でしかない段階でもって、教会は出来うるかぎり、異端者たちの活動を封じ込めた。

というより異端者と呼ばれた時点で、彼らの社会活動は、すでに完璧に封殺されていたと言えるだろう。異端宣告や破門は、ヨーロッパの中世においては、ほとんど「社会的な死」と同義であったからだ。

いや、この際、異端者たちの悟りが進展して「ルベドの域」にまで高まらなくてもよい。そこまで求めずともよい。

そこまで求めなくとも、少なくとも彼ら異端者たちの「←」のうちには、多くの「宗教的正論」が含まれていたはずだ。それが僅かでも、教会側の考えを変えることはなかったのだろうか。

残念ながら「そのような事は起こるはずもなかった」というのが答えである。

教会にとっては、その正論を聞くこと自体が、すでに耳障りだったからだ。特権を貪ることによって、際限もなく腐敗していた教会にとっては。

そう、巨大な権力機構と化していた教会にとって、その「←」的な正論は、耳元でブンブン飛んでいる、ハエの羽音にも似たものだったのだ。

これを黙らせなくては、とうてい落ち着いてなどいられない。その心情は、容易に察しがつくというものである。

自己否定の行為

かくして、異端者たちに対する大鉈が振るわれた。多くの人々が、その教会による暴力によって殺された。アルビジョア十字軍（ 異端カタリ派の撲滅 ）などは、その最たるものだろう。

無論その異端者のなかには、間違いなく「死んではならない人たち」がいたはずだ。すなわち、真摯なる「←」の体現者たちのことである。

彼らは本来「どうあっても、キリスト教の『内側』に存在しなければならなかった人たち」だった。

キリスト教が、真に「真理の保持者」「正常な宗教」たりうるためには、どうしても必要な人たちだった。

なぜなら、上下のベクトルが円満に流動してこそ、宗教は、真の存在理由を与えられるからである。

なのに教会は、それを自ら撲滅してしまったのだ。よってこれは、キリスト教会による、愚かしいにも程がある重罪であろう。

またそれは大変グロテスクでもある。大局から見れば、それは、タコが自分の足を食べるような自己否定、自己侵略に他ならないからだ。

いくら腹を空かせていると言っても、自分で自分を食べては意味がないだろう。

地獄の悪鬼にも似て

その点、宗教改革者であるルターは幸運だった。彼はキリスト教史上で初めて、堂々と生き長らえることが出来た異端者だったからである。

実のところルターは、異端者から「改革者」へと格上げされたのである。

なぜそうなったか。それは「我々には、そのような改革者が必要である」という考えが、当時のキリスト教圏で、急速に共通認識化されたからである。

つまり、それほどにも――早急な改革が必要なほど――キリスト教会は、組織として腐敗していたのである。そう考えると、ルターの延命も、どこか皮肉じみた話に思えてくる。

ともあれルター以前には、数多くの異端者たちが、教会の暴力によって、肉体的生命を奪われたり、社会的生命を奪われたりしていた。

有名どころではウィクリフやフスがそうだし、名もなきカタリ派信徒や、ヴァルド派信徒なども同様だった。

この有様を神の目から見たら、それはもう明らかなる冤罪である。

それだけに異端者たちにとってみれば、彼らの「死」は、さぞかし無念な出来事だっただろう。この私の耳には、今もなお、彼らの教会を呪う声が聞こえてくるようだ。

そういえばルターは、カトリック教会をして「悪魔の巣窟であり、それ自体がアンチ・キリストである」と非難した。今思えばそれは、かなりの純度でもって真実であったと思う。

言うまでもなく、当時のカトリック教会は、自分たちにとり都合の悪いものに対しては、きわめて狭量だった。

そのくせ自分たちの腐敗に対しては、恐ろしいほどに寛大だった。その徹底した二重基準には、まさに地獄の悪鬼たちを彷彿とさせるものがある。

これは罰せられなければならない、彼らの「罪」でろう。

（２）判決の言葉

教会存続に対する否み

正直を言えば、ほかにも「教会の罪」として挙げたい事柄は多い。

とくに気になるものと言えば、彼らの女性蔑視が生みだした「魔女狩り」の悲劇がまず一つ。

それと、彼らの無駄な教義が生みだした「キリスト教国の不衛生」にも触れておきたかった。これが大規模な疫病と、人々の大量死を誘発したからである。

しかし、本腰を入れて書き始めたら、その悪事を挙げるのに、どうもキリが無くなりそうである。よって、このあたりで教会の罪を数え上げることはやめにしておこう。

もし「教会の罪」について食い足りない読者があるならば、私からは、ヘレン・エラーブの『キリスト教 - 暗黒の裏面史』を勧めておこう。

ここには、教会の罪についての、実に率直で、真摯なレポートが記載されている。いや、記載どころか満載されている。

もっとも、本書の第９章の叙述だけでも充分に、次に掲げる「この章の結論として、私が主張したいこと」は、読者に納得してもらえると思う。それはつまり、
「キリスト教が、これ以上存続しても、もはや世界にとって有益なものにはならないだろう」ということなのであるが。

これをもっと率直に表現すれば「キリスト教は、もう終わりを迎えてもよいだろう」ということである。

プラスを上回るマイナス

もちろん、キリスト教という宗教には、プラスの面も多い。

その弱者に向けられた優しい眼差しは、社会保障や慈善活動として結実し、社会の底辺層を、まさにイエス的な愛で潤している。

たとえば、修道女マザーテレサの献身などには、私も心を動かされてしまう。たとえ共産主義がなくなっても、この「弱者への愛」だけは無くなってほしくないものである。

また、イエス的な許しは「目には目を、歯には歯を」という旧約の倫理を、軽々と乗り越えた。それによって、現代の司法の場においても、未来志向の有意義な判決を、数多と生みだしている。

ときに原告側を苛立たせる「甘い判決」も、人類規模で考えれば、その多くが、未来の幸福につながっているはずだ。

それからキリスト教は、美術や音楽など、芸術分野に対する貢献度も高い。

この分野の豊麗さに関しては、仏教圏のそれを圧倒しているとさえ思う。やはり教祖が芸術家気質であると、あとに続く者たちの仕事もまた、どこまでも洗練されるのだろう。

しかし、このようなプラス面を見てもなお、それでもなお、私は思うのである、

「キリスト教は、これ以上存続しなくともよい。共産主義を葬るための生贄として、ここで終末を迎えるべきである」と。

積み重なった罪

イエスと教会には罪がある。

その罪は、イエスが共産主義の淵源となったことだけではない。それに加えて、教会が、イエスの過誤をスルーしたことだけでもない。

その歴史を眺めれば、教会は、あまりにも多くの異端者の血を流してきた。多くの差別を生みだし、病気を生みだし、人々を不条理な暮らしへと追いやってきた。

その罪が、キリスト教の頭上に、山と積み重なっている。もしそれが落ちてきたら「キリスト教」という聖堂を、すべて粉砕してしまいそうなほどにも。

それほどにもうず高く、これまでの罪科が積み重なっている。

とすれば、もはや特別な感情を排して眺めても、キリスト教は、その終末を迎えるのが自然な状態にあるのである。

それとも、イエスの寛容が、こうしたキリスト教の存続さえ許してしまうだろうか。

いや、いかなイエスであっても、もうそれを許容することは出来ない。彼でさえ許しきれない。なにせ教会の罪だけならばまだしも、そこには「イエス自身の罪」も含まれているのだから。

いまやイエスは、再びその身に十字架を背負って言うだろう。

「それが人類への愛となるならば、私と私の組織をも、死と終末に明け渡そう」

私もまた、イエスの代理人として言おう。私はキリスト教、とりわけ教会制度の終焉を求める。これが再臨のキリストが与える「最後の審判」である。

感謝と惜別

キリストが再臨するこの時代まで、

イエスの教えを保存してくれたことを、

私はキリスト教会に対し、

心から感謝する。

これまでの教会には確かに、
その存在の意義があったと、
私は衷心から、
あなた方に、述べ伝えたいと思う。

しかし、未来の存在意義については、
キリスト教会はその手に、
確固たるものを持っていない。
認めがたい事だろうけれども、
悲しい事だろうけれども、
それが、再臨のキリストである、
私の目から見た事実である。

また、それよりも重要な、
ここで指摘すべき事実もある。

キリスト教会とは、つねに、
第二のキリスト出現を阻止せんとして、
あらゆる手段を
尽くしてきた組織だった。
それが本流としての「教会史」だった。

しかし、
キリスト教がキリスト教であるかぎり、
それは信徒たちが、
「キリストの再臨」を願望しないでは、
済まされない宗教なのだ。

そして今や確かに、
「キリスト再臨の時」は訪れた。
そうであるならば、
かかる到来をブロックしようとし、
再臨の足枷となる「教会」は、
自動的に、再臨のキリストによって、
踏み潰されなければならない。

それはまさしく、
教会という組織の「宿命」である。
つまり滅びこそ、
キリストの再臨時における、

教会の持って生まれた定めなのである。
これが再臨のキリストによる、
二つ目の「最後の審判」である。

再臨のキリストによる福音書　6-Ⅱ

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社